

麗澤教育

第15号

平成21年(2009)4月

特集：社会で活躍する卒業生



キャンパス中庭のハンカチの木

『麗澤教育』発刊の趣旨

本誌は、麗澤大学における教育、特に建学の精神を中心とした人間教育について、教職員や学生、部活動の指導者、保護者、卒業生などが、お互いに議論を深め、かつ、それぞれの実践や現状を報告するためのメディアです。年1回発行しています。

麗澤教育 第十五号 〈目次〉

フォト・アルバム この一年 ① 5

〈特別寄稿〉

麗澤大学開学五十周年を迎えて 佐藤政則 6

〈新入生教育 ①〉

外国語学部オリエンテーション・キャンプ 田中 俊弘 8

〈新入生教育 ②〉

経済学部における初年次教育 清水 千弘 15
——道経一体の経済教育

〈特集〉

社会で活躍する卒業生 21

① 麗澤に学んで 秦 耕司 22

- ② 作陶の日々 稲田 雅熙 27
- ③ 麗澤という学舎 小山 高正 31
- ④ 「麗澤」という「誇り」 山本龍太郎 36
- ⑤ 私と麗澤教育 岡田あずさ 41
- ⑥ 現在いまに活いきる麗澤での学び 三浦 一壽 45
- ⑦ 麗澤で得たこと 藤原 扶美 49
- ⑧ 多文化多宗教社会で求められる「互敬の精神」 北岡希久朗 53
- ⑨ 麗澤大学で学んだこと 古賀 雅子 58
- ⑩ 麗澤で得たもの 齊藤 臣一 61

フォト・アルバム この一年 ② 66

〔麗大生の今〕

座談会 学生生活を語る 井出 元
齊藤 由佳
梶山みゆき 67
矢部 保旭
今井 覚

【コラム】

〈部活1 バスケット部〉	
仲間の大切さ……………	萬羽 香織 80
〈部活2 ダンス部〉	
サークルからダンス部へ……………	飯野 翔太 84
〈部活3 フィルハーモニー管弦楽団〉	
フィルハーモニー管弦楽団の今……………	内田さくら 88
ドーバーの小石……………	田中 駿平 93
「よい大学」とは……………	今村 稔 97
麗澤大学での一年間留学……………	フランツィスカ・クリンナー 101
〈温故知新・その七〉	
東亜専門学校の創設……………	池田 裕 103

*寄稿していただいた在学生の学年は、平成二十年度のもので、
*表紙写真 平成二十三年から使用開始の新校舎。



オリエンテーションキャンプ(横浜中華街にて)
(2008・4・7)



導入授業(2008・4・13)



全国優勝した武術太極拳部(2008・4・13)



留学生歓迎懇親会(2008・4・25)



野外昼食会(2008・5・9)



中山学長、ドイツ・イエーナ大創立式典に参列
(2008・5・14)

麗澤大学開学五十周年を迎えて

副学長 佐藤政則



皆さん、いよいよ麗澤大学が五十周年を迎えます。長寿国、日本ですから五十歳なんてまだまだ若いわけで、たいしたことはないと思う方も多いでしょう。でもよく考えてみると、本学の創立者、廣池千九郎先生は一九一〇年頃から社会教育活動に踏み出していますので、四年制大学として開学した昭和三四（一九五九）年までに、実はおよそ五十年間の前史をもっているのです。だから、現在の麗澤大学は、百年という長い時間のなかで育まれてきたと考えるべきでしょう。

歴史を重ねることができたということは、それだ

け多くの方々が陰日向に麗澤を支援して下さいましたということです。したがって五十周年を祝って開催される様々な周年記念事業・行事の根幹には、こうした多くの皆様への深い感謝の気持ちが貫徹しています。これまでの経緯を振り返り、そこに多くの方々が存在したことを知る。そこから自然に感謝の気持ちが湧きあがってくるようにしたい。これが周年記念事業・行事の第一の意義です。

五十年という節目の時期を迎えたわけですから、将来を見据えることも大事なことです。どのような研究・教育分野を志向するとしても、根本の考

え方にブレがあつてはいけません。中山理学長が、とくに考えてほしいと提示されたテーマは「知のモラルの再構築」です。「知とモラル」ではありません。「知のモラル」です。これは、現代社会が鋭く問いかける問題でもあります。まさに麗澤大学こそ道筋を示すべきテーマであろうと考えます。

本学の研究・教育の現場からは、これまでも数多くの斬新な取り組みを発信してきましたが、これからはなお一層の研鑽を積み、「知のモラル」という現代社会が求めている課題に貢献できる研究・教育機関にならねばならないでしょう。

当然かもしれませんが、麗澤大学には、能力も意欲も高い学生たちがいますし、目的を定められず焦燥の日々を送る多くの学生たちがいます。留学生たちも複雑な思いで学んでいます。これらの様々な学生たちが納得できるキメの細かい教育環境を提供し続けることが、本学の最も重要な課題です。学部や大学院の学生たちと一緒に、共に思い悩みながら、こうした教育現場を創り上げていく、なんと

素晴らしいことだろうと思います。

五十周年は、次の百年を目指して新しいスタートを切る、壮大な歩みの始まりなのです。

さあ、共に最初の一步を踏み出しましょう。

【周年記念事業】

● 新校舎の建設―森と共生するキャンパス―

【主要な周年記念行事】＊二月現在

● 麗澤会ブロック別記念大会の共催（五月から順次各地で開催）

● 国際人口学会・歴史人口学部会による国際人口セミナー「経済および環境の激変に対する人口学的対応」の招致と一般公開シンポジウムの共催（五月）

● 企業倫理シンポジウム「変わる企業と経営者の哲学」の開催（七月）

● モラル・サイエンス国際会議の共催（八月）

● 開学五十周年記念ホームカミングデー・大同窓会の開催（十月）

外国語学部

オリエンテーション・キャンプ

外国語学部准教授 田中俊弘



外国語学部新入生の四月はとても忙しい。毎年、二日の入学式前後から約十日間、TOEIC試験なども含め、多様なオリエンテーション、ガイダンス、テストをこなすのに加えて、その間に群馬や新潟、あるいは大学キャンパスと横浜中華街などで、専攻別にオリエンテーション・キャンプを実施してきたからである。

毎年のキャンプの契に掲載されるキャンプの目的は、①麗澤大学の建学の理念を学ぶこと、②この大

学で共に学び、生活する意味を考えること、③学生同士および教員との交流、親睦をはかること、そして④集団活動をとおして、他人の特性や気持ちを理解しようという思いやりの心を涵養することの四つである。

これらの目的を同じくして、道徳科学担当の川久保剛先生が率いる「自校史チーム」の学生スタッフから説明を受けながら（※中国語・中国文化専攻以外）、麗澤館などの見学を行って建学の精神を学ぶ点と、各専攻の上級生スタッフが、運営面でも教職員と新入生をつなぐ面でも大きな役割を果たす点などを共通項とするが、その他の具体的な内容については、各専攻が特色あるプログラムを実施してき

た。キャンパス内の研修寮に宿泊し、先生と上級生と少人数のグループを作って中華街を散策する中国語・中国文化専攻。群馬県の谷川セミナーハウスに宿泊した後、新潟県十日町市に移動して能舞台見学したり、雪掘り体験をする国際交流・国際協力専攻。谷川で、日本人新入生と外国人新入生の交流に重きをおいたプログラムを行う日本語・日本文化専攻。ドイツ人留学生に参加してもらい、その言語に初めて触れる機会をふんだんに盛り込んだドイツ語・ドイツ文化専攻。英語コミュニケーション専攻と英語・英米文化専攻は合同で、新入生同士が知り合うことに重心を置いたキャンプを展開してきた。

学部のキャンプにみられる、先ほどあげなかったもう一つの共通項は、新入生の反応である。毎年、キャンプ終了後に回収するアンケートには、かなり似通ったコメントが並ぶ。すなわち、大学に入ってから早々の知り合いもない内に、他の同級生と相部屋で宿泊形式のオリエンテーションを行うことに戸惑い、緊張していたが、終わってみれば、そのよ



うな行事があったおかげで同級生とも仲良くなれたし、上級生や教職員とも話す機会を得て、これからの大学生活に対する不安が解消されたという反応である。毎年六月発行の『麗澤大学ニュース』に、キャンプに参加した新入生の感想が掲載されてきたが、それらに限らず、この行事は学部新入生に概ね大好評であり、個人的には、出発前の不安をどう和らげてあげられるか、そしてキャンプに参加できなかった学生をどうケアしてあげられるかが、一番の課題だと考えてきた。

外国語学部オリエンテーション・キャンプは、長い歴史を持つ行事である。私も本学卒業生の一人だが、麗澤大学に入学した二十年以上前にも、同様のキャンプを経験した。まだ外国語学部英・独・中三学科のみ（日本語学科創設前）で全寮制だった当時は、学寮課主催行事で、新入生全員合同で谷川セミナーハウスに宿泊し、共に建学の精神に触れ、教職員と交流し、グループでの出し物をやった記憶がある。私の場合、そのグループのメンバーとサークル

を立ち上げ、彼らとは学科を超えたつながりを卒業後も維持しているし、最近の学生を見ていると、キャンプでの班分けが、交友関係の重要な起点になってきたようである。私の目には、英語専攻という以外に共通項が見当たらず、性格的にもばらばらに思える「仲良しグループ」の学生たちに聞いてみると、たいいていの場合、キャンプで同じ班だったという答えが返ってくる。運営の仕方は変わっても、キャンプが持つ意味は本質的に変わっていない。「人のつながり」や「アット・ホームな雰囲気」を売り物にしている外国語学部の伝統であった。正直、こんなに運営が大変な行事が、よくぞ続いてきたものだという感慨もある。全寮制時代のキャンプの伝統がなければ、誰かが新たに始めたいと言いついて、なかなか実現できなかったのではないかとさえ思う。

私は英語学科と英語二専攻の実施担当を過去七年間経験したので、これまでのキャンプ内容の具体例として、英語専攻のプログラムを紹介したい。私が



引き継ぐまで、十年間キャンプ担当をされた犬飼孝夫先生のご指導の下で、英語専攻の学生スタッフは、主体的にプログラムを企画・運営する集団となった。リーダーを中心に春休み中に企画を練り、彼らの発案で、公式パンフレットとは別に、教員や上級生スタッフのプロフィールを掲載した非公式パンフレットを作成するようになった。私は専任教員として初めて参加したキャンプから、学生スタッフには感心しきりであった。皆がプログラムの流れや自分たちの動き方を理解しており、しっかり仕事をこなす素晴らしい学生たちだった。

それでも、翌年に私が担当を引き継いだ頃は、スタッフに選ばれてから「海外に語学研修に行くので春休み中は来ません」と言い出すような学生もいたが、その後は皆が春休みの企画会議をかなり重視するようになった。寝坊で会議に遅刻したスタッフが、泣きそうになりながら皆に謝罪する姿も目にしてきた（こんな姿勢を授業でも見せて欲しい！）。キャンプ中も（時にハメを外す一面もあるにせよ）

真摯で、たとえば教員が話をしている時にウトウトしたスタッフを、夜の会議で「先生に対して失礼だ」と学生リーダーが叱り飛ばす光景もあった（こんな姿勢も授業でも見せて欲しい）。大学教員は因果な立場で、日頃は教室以外で学生と接する機会が少なく、彼らを授業態度や成績のみで見ているが、キャンパスを運営する学生たちは、おそらく他の多くの先生が思っている以上に真面目で熱心である。どうすれば新入生を居心地良くしてあげられるかと、細かな点まで検討する様子は、素晴らしいの一言に尽きる。教室では見えない彼らの別の側面に触れられたという意味で、キャンパス担当は私にとって楽しくて仕方のない仕事であった。

英語専攻の場合、翌年度スタッフの募集を十二月に締め切り、教員による選抜を経て、冬休み前後に最初の会議を行ってきた。スタッフの競争率は毎年二倍前後で、この数字も行事の成功を物語っている。新入生として参加したキャンパスが充実していたからこそ、そしてそれを仕切る上級生の姿に憧れた

からこそ、毎年多くの一年生が我こそはと手を挙げてくれたのであり、教員として、それを嬉しく思いつつ、選抜しなければならない切なさも感じてきた。

一月にも一、二度会議はあるが、彼らが本格始動するのは春休みに入ってからである。二月から三月には毎週一回か二回、午前中に二時間程度の全体会議を行い、午後は「担当プログラム別に必要があれば」と言いつつ、基本的には皆、夕方まで話し合いを続ける（日程調整から全て自発的であり、教員がやらせているのではない）。入学式が近づく三月最終週はほぼ毎日、下手をすれば土曜や日曜まで大学に集まって、パンフレット作成や企画を仕上げる作業をする。彼らはもちろんやる気にあふれてスタッフに応募したのだが、会議や仕事の多さと緊張で、この時期には少しブルーになる者が出てくるほどである。

学生スタッフの仕事は大きく三種類あり、一つめは、各プログラム担当としてそれぞれを企画・実施

すること、二つめは、班担当として自分のグループの新入生の面倒を見ること、そして三つめは、体調不良の学生の世話（保健）、ゴミ処理（美化）、写真とビデオ撮影（記録）など、プログラムや班を超えたキャンパス運営に携わることである。学生リーダー二人が統括する下で、スタッフがこれらを兼務しており、相当忙しいにもかかわらず、新入生への働きかけと笑顔も忘れない。また、問題への対処にも一生懸命だ。過去には、新入生の家族にご不幸があったり、財布が紛失したこともあった。また、他の学生と衝突したり、体調を崩す新入生も毎年のように出てくるが、そんな時に教職員よりも近い立場から彼らを支えてくれるのも、上級生スタッフたちであった。彼らは一年生からある種の憧れの目で見られているが、彼らがそれに値する仕事をしてきたからに他ならない。

これまで、英語専攻キャンパス・プログラムの骨格は毎年ほぼ決まっており、自校史チームが活躍する大穴記念館や麗澤館の見学の他に、ゲームを中心と

したプログラム1、教員の話聞くプログラム2、上級生のパネルを見た後、グループ毎に討論して発表をおこなうプログラム3、そして、班毎に英語で寸劇を演じる「ファンナイト」へと進んでいた。ただし、それぞれの時間枠をどう使い、具体的にどのような内容にするかは、各プログラム担当が企画案を出し、皆で議論しながら決めていく。毎年三月中旬には旅行業者、ホテル、学生課と学生スタッフとの事前打ち合わせが行われるが、英語専攻スタッフは、いつもその日までかなり詳細な企画書を作成しており、打ち合わせでも次々と具体的な希望を出してきた。数年前、利用するホテルを変えた年には、私が学生課の車を運転して学生のリーダー1、サプリーダーと一緒に現地見学を行い、ホテルの会場で、パーティションの出し入れにかかる時間から音響、照明、部屋の広さ、柱の位置と太さまで、丁寧に確認したこともあった。それらも含め、毎年入念な準備を経て、新入生を分刻みのスケジュールで動かすような行事を運営してきたのだ。

二日目晩の「ファンナイト」は特に大きなイベントである。新入生は、入学式の日の午後の説明会で自分が何班かを突然知らされ、同じ班のメンバーや担当上級生と顔を合わせ、それから三日後の出発までに、小劇の配役やシナリオ、持参する物などを決め、キャンブ二日目午後にも打ち合わせや練習をして舞台に立つ。そして、審査する教員や他の学生の前で、衣装や小道具、音楽にまで工夫をこらして各班が英語寸劇を行うのである。うまく演技できて喜ぶグループも、失敗して残念がるグループも出てくるが、実はそれ自体はあまり重要なことではない。入学式直後から強制的に作られた班毎に、他のオリエンテーションの合間の時間を使って一緒に準備した経験こそが、彼らにとって大学生活最初の共同作業となり、他のプログラムと併せて、大学を知り、仲間を作る契機となったのだ。

キャンブは上級生を人間的に成長させる一方で、新入生にとっては、麗大生になるための重要な、一種のイニシエーション（文化人類学という

「通過儀礼」として機能してきた。現在、学事日程の変更などで、オリエンテーション・プログラムの大幅な見直しが求められており、キャンブの存続自体も議論されているが、たとえ形を変えても、彼らのような熱意溢れる上級生が新入生を「麗大生にする」行事が今後も機能していくことを祈念している。

新入生教育②

経済学部における初年次教育

——道経一体の経済教育

経済学部准教授 清水千弘



最近における世界的な金融危機の影響を受け、経済システムに対する信用が失墜するとともに、経済学に対する批判も多い。しかし、一概に経済学といっても、大学教育における経済学教育の背景にある思想には、それぞれの大学において大きな相違がある。

本来、わが国の経済学は、中国で発展した考証学者による「経世致用の学」の影響を強く受けて江戸時代に儒学者等によって発展した「経世論」（経世・済民）を基礎に持つ。太宰春台『経済録』は、「凡（およそ）天下國家を治むるを経済と云、世を經め

民を濟ふ義なり」としており（武部善人『太宰春台 転換期の経済思想』御茶の水書房、一九九一年）、経済学とは、現代の狭義の経済学の枠組みを超えて、政治学・政策学・社会学などきわめて広範な領域をカバーするものであった。

麗澤大学経済学部においては、創立者廣池千九郎が提唱した「モラロジー」に基づく知徳一体の教育を基本理念とし、現代の狭義の経済学の枠組みを超えた視野から、経済教育を実施している。創立者廣池千九郎は、「経済とは仁義をもって国を治めることである」とし、先に紹介した「経世済民」の精神

を基礎に置き、「道経一体」の経済教育を提唱した（モラロジー研究所編集『伝記廣池千九郎』より）。

経済学部は、経済学科の①理論・計量コース、②経済政策コース、③ファイナンスコース、④公共政策コース、⑤国際社会コース、経営学科の⑥戦略・マーケティングコース、⑦組織・人事コース、⑧会計・税務コース、⑨経営情報コース、⑩企業法務コースから構成される。

このようなコースからも理解されるように、政治学・政策学・社会学を含む幅広い視野から、知徳一体の教育体系としての経済教育を実施している。このような専門教育を実現するためには、初年次教育が極めて重要な意味を持つ。

また、政治学・政策学・社会学などを含む広範な領域をカバーするからといって、狭義の経済教育の水準を低下させてよいというわけではない。

経済学部の初年次教育は、高度の専門教育を受けるための基盤を強化することが目的に置かれており、基礎科目・基礎専門科目と外国語科目から構成

されている。基礎科目においては、経済学・経営学を学習していくうえでの基盤になる教養的な性質をもつ科目群と、専門科目の導入にあたる科目群に大別される。

初年次教育は、入学前から開始される。近年、多くの大学に共通した現象ではあるが、入学試験の多様化に伴い、比較的早い時期に入学が決定される。そのため、高校教育から大学教育への移行が極めて重要な問題となる。このような問題に対応するために、入学が決定された直後から、大学における専門教育への移行を円滑に進めるために、英語および数理科学の入学前教育を実施している。

具体的には、入学前教育は、AO入試および各種推薦入試の合格者を対象として、入学手続きが完了したのち、おおよそ十一月から十二月にかけて英語および数理科学の教材を郵送し、指導を開始する。その成果を踏まえて、二月に集中講義をそれぞれ二単位相当分ずつ実施する。単位認定を前提とすることから形式的な教育ではなく、大学教育水準条

件を満たした教育を実施していることが特徴である。

入学直後には、高校までの受験型教育から脱皮し、学生の視野を広げ、自由な発想をなし得るようにするために、「社会科学分析入門」の授業を実施する。同講義では、まず道徳科学担当者による建学の精神に関する講義、学部長による社会科学分析の学習目的の講義、経済学・経営学の基礎に関する講義を踏まえて、川喜田二郎氏が提唱した発想法の一つである「KJ法」に基づき、学生全員に三日間の集中方式で履修させる。同講義は、前述のような幅広い視野から経済学を学習させるために、社会科学としての経済学の位置づけを認識させるとともに、解答の存在しない社会現象を学習する経済学の特質を、学生に認識させることを主目的とする。社会科学としての経済学を学習させるための思考法や知的好奇心を高めるための工夫が施されているだけでなく、教員のみならず上級生との信頼関係を築くことも目的としている。そのため、三十人程度を一

つのクラスとし、各クラス六つのグループを作り、そこに上級生スタッフが入り講義が展開される。グループごとに、与えられた大きな枠組みの中で課題を設定し、その課題の構造化を徹底的なブレインストーミングに基づき実施する。そして、最終日にはプレゼンテーションが行われる。このような講義を受けて、自らが考えることの大切さと、仲間と議論をすることの大切さなど、社会科学の魅力の一端を触れることとなる。このクラスは、原則として、その後、一年間にわたり同一教員がクラス担任として学生生活全体をサポートするとともに、「経済学入門ゼミナール」、「経営学入門ゼミナール」として一緒に学習することとなる。

本格的な学期が始まってからは、建学の精神を深く理解させ経済学・経営学を学習していくことの社会的意義を理解させるために「道徳科学A・B」を、情報化社会に適用するための準備として「情報科学A・B」を、経済学・経営学を科学的に分析するツールを身につけるために「数理科学A・B」を

必修として学習する。

建学の精神を学習させる「道徳科学」に関する教育は言うまでもないが、現在の情報化社会に適用できる情報処理・分析能力を習得させるための情報教育においては、特徴的な講義が実施されている。特に、前身となる国際経済学部には産業情報学科が設置されていたこともあり、情報教育を行うための設備、スタッフ、そして教育プログラムは極めて充実している。また、国際経済学部時代から、数理科学を必修として、プレースメントテストに基づく三十人程度の能力別小人数クラスにより、共通教材をベイスとしてきめ細やかな教育が実施されている。

加えて、専門科目への導線として、経済学科においては基礎科目として「経済原論A・B」「経済学入門ゼミナールA・B」を必修科目とし、基礎専門科目（選択必修）として「マクロ経済学A・B」を履修させている。特に、「経済原論A・B」と「経済学入門ゼミナールA・B」とを連携させ、ハーバード大学をはじめとする多くの米国・英国をはじめ

とする欧州の大学でテキストとして活用されている国際的に標準的な教科書の一つであるマンキュー『経済学』(Nicholas Gregory Mankiw, *Principle of Economics*)を用いて教育を行っている。ここでは、一方的な講義を行うのではなく、経済原論では講義を担当し（平成二十一年度は月曜日の二時限目）、その講義を受けて少人数に分割させたクラス単位でその理解度を測定するために、講義に相当した演習問題を各クラス共通で実施する（平成二十一年度は月曜日の三時限目）。経済原論担当者は他の経済学入門ゼミ担当教員と同様に、同講義も担当し、強い連携が図られている。また、おおよそ一月に一度に実施されているFDを通じて、学生の理解度の確認などがはかられ、学期期間中においても進路調整等がなされるとともに、各クラス共通試験を実施することにより学習の到達レベルが測定されている。また、後に紹介する留学を前提としたIMCコースにおいても、同一の教科書の英語版を用いて学習させているため、全学的な到達レベルの標準

化が図れるように設計されている。

続いて、経営学科においては、基礎科目として「経営学概論A・B」「経営学入門ゼミナールA・B」を必修科目として、基礎専門科目（選択必修）として「簿記原理」を履修する。「経営学入門ゼミA・B」においては、経営学が実践的学問体系であることを前提として、一学期には「ビジネスゲーム」と呼ばれる実際の経営を模倣させた教育手法を用いて、経営の実態が総合的に把握できるように少人数教室により学習させている点が特徴的である。ビジネスゲームは、平成二十年度よりFDグループが設置され、より発展的なビジネスシーンに対応できるように、様々なゲームの開発がおこなわれている。また、二学期においても、グループワークを中心とした実践的授業が実施される。

以上のような通常のクラスに加えて、海外留学を前提として、一年次よりネイティブの教員を中心として提供される外国語専門コースが配置されている。英語により専門科目を学習するIMCコー

ス、中国語により専門科目を学習する中国MCコースでは、入学後直後に選抜が行われ、教育が開始される。外国語教育だけでなく、外国語で専門科目の受講もできることとなっており（たとえば、Microeconomics, Statistics）、二年次後期からの海外留学における高度な専門教育に備えている。

さらには、将来、税理士試験の受験を目指すRE PPL税理士コースが設置されているが、同特進コースにおいては、一年生前期の簿記原理の試験結果および選抜試験を受けて、教育が開始される。この選抜試験に合格した学生は、大原簿記学校との提携プログラムにおいて、一年次の時から税理士を目指すこととなる。

さらには、大学卒業後の出口戦略を強化していくために、平成二十一年度より「麗澤スピリットとキャリア」という科目を設置し、就職に向けての意識を高めるために、コミュニケーション技術や企業社会の実態、自己分析など、キャリア形成を行うための基礎を学習させていくことが予定されている。

現在、大学を取り巻く環境は大きく変化してきており、そのような環境変化に対して教育プログラムをどのように設計していくのかということは、各大学ともに抱える大きな課題である。時代の変化に揺さぶられながら、そのような流れに迎合するのではなく、大学としての教育理念を崩すことなく、臨機応変に前向きに対応していくことが要求されている。

また、感覚的ではあるが、大学内における時間の流れも速くなってきているように感じる。いわゆる忙しい学生が増加してきているのである。就職活動開始時期の早期化や経済的な問題からアルバイトなどの課外活動の増加などが原因かもしれない。

このような中で、教育水準を維持しつつ、大学としての教育理念に基づく学習到達目標を達成していくためには、初年次教育の重要性がますます高くなっていくものと考えられる。

麗澤大学経済学部も、平成二十年度に国際経済学部から経済学部に移行し、かつて設計された教育プ

ログラムの問題点を修正する形で、より時代の要請に応じた教育プログラムへと進化してきている。また、きめ細やかなFDグループの設置と活動を通じて、教育水準の向上と見直しが実施されている。

このような取り組みをより積極化させることは言うまでもないが、再度、四年間を通じた学習到達目標を見直す中で、初年次教育の在り方を再検討する時期を迎えているものと思う。より充実した教育体系を実現するために努力していきたい。

〈特集〉 社会で活躍する卒業生

麗澤大学は本年開学五十年を迎えました。そこで麗澤教育の成果を確認したいと考え、「社会で活躍する卒業生」という特集を企画しました。

三十年に亘って大学教育に携わっている秦さんは学生一人ひとりの個性を尊重し、常に自らを見つめながらに教育者としての人生を歩んでこられ、「麗澤で学んでよかった」と述べていますし、「陶」の世界で活躍するようになって三十年の稲田さんは大学時代にあつた一冊の本のことを通して大学時代の意義を述べ、以後の作陶の人生を述懐して、作品とそれを作り出す自らの人間性の重要性に気づかされたと記しています。さらにイギリス語学科を卒業した小山さんは、野生のニホンザルの研究に取り組み、心理学の教授として教鞭を執っていますが、「麗澤で学んだことが私のすべてを作っている」と述懐し、「人を育てる仕事に就けたことは幸せであつた」と結んでいきます。このように麗澤大学を卒業して以来、一貫して自らの道を歩み麗澤の園で植えつけられた種子を見事に開花、結実させた生き方に心より敬意を表したいと思

います。

また若い卒業生が懐く麗澤教育への思いを拝読すると、社会に出た後に麗澤教育の意義を改めて自覚し、麗澤で学んだことをそれぞれの場において活かしている姿に熱いものを感じました。ある人は「自分のお店」を開店し、また各業界のトップとして活躍され、教鞭を執るなど様々な進路にすすんでいます。共々麗澤大学の時代に学んだことを基盤として活躍している姿を知ったことは本学の教育に携わるものとして大きなよるこびであり、在学生に対して大きな勇気と可能性を知らせるものと考えられます。

投稿された原稿を拝読して感じたことは、麗澤教育の意義は卒業後に自覚されるものであり、長い時間を経て、限りなく高められていくものであるということ

です。執筆した下さった方々には、御多用の中、共に快く投稿して下さったことに対して心よりお礼申し上げます。

(麗澤大学学長補佐 井出 元)

麗澤に学んで

長崎県立大学教授 秦 耕司

(第三十期 中国語学科卒)



私は現在長崎県立大学で中国語を教えております。教壇に立って三十年になりますが、授業をしていて、学生に接していて、いつも思うのは、麗澤で学んでよかったということです。

私は一九七七年（昭和五十二年）それまで二年間通訳や中国人との間に立った仕事をしていた中国から帰国し、中国と縁の深い長崎の地で中国語を教えることになりました。北京から真っ直ぐ勤務校のあるここ佐世保に來ましたが、今でも鮮明に覚えているのは、外国語仲間の歓迎会の席上で、「国経大（当時は長崎県立国際経済大学と言いました）は外国語教育に力を入

れている。単位は長崎大学や佐賀大学よりも多い。」と言われたことです。初めて教員となって新しい生活が始まるうとしている時のこの一言は、私にとって大きな励みになりました。しかし張り切るのはいいとしても、生来の単純さと経験の乏しさからでしょうか、独り善がりのところがあって、それは大学が独立法人化して教員の立場が変わった今も変わらず、失敗のたびに苦笑と反省を繰り返しています。

毎年四月になると中国語のクラスは、全国一斉に（多分）一年生の発音指導で授業が始まります。「ポ、ポツ、モ、フォ、…」希望に満ちた活気ある

季節の到来です。新入生を迎えるこの季節にいつも思いつくのは、麗大に入学した同じ時期のことです。私たちの頃の中国語学科は、一年生の最初の一週間は、七コマある中国語の授業はすべて有馬先生の発音の授業でした。テキストは『標準中国語発音編』。これは方言差の大きな中国で、標準語の普及を目指して編集された中国人向けのテキストですから、発音練習用の例文も難しく、説明も中国語で書かれています。もちろん録音も普通のスピードですから、私たち初学者にとっては目の回るような速さです。これできなり脳天をガンと叩かれたような気になりました。そこへ二日目には予告なしの発音のテスト。第二ラウンドで早くもノックダウンです。この先どうなるのかと不安は増すばかりでした。幸い同室の上級生から毎晩発音練習の手ほどきを受けましたので、そのうち自分もうまくなる、という希望を抱きながら何とか頑張ることができました。

二週目に入ると、それぞれの先生がそれぞれの教科書で「ニイハアオ」から始まります。と、今まで高速

で走っていた汽車が急ブレーキをかけ、まるで違った風景を見ながらコトコト走り出したようで、ホッとするやら気が抜けるやらで、これなら自分もついていけると、また違った意味でやる気が起こってきました。これが麗大の中国語学科で中国語を学び始めた時の強烈な印象です。そして県大で教壇に立つてからは、毎年四月の発音導入期の時はこのことを思い浮かべながら、どうしたら学生の意欲を引き出すことができるか、どうしたら学生の反応を確かめることができるか、と考えながら学生の反応を確かめつつ授業を進めています。麗大入学式の学

長訓示の最後に、廣池千英学長から世阿弥のことば「初心忘るべからず」を賜りましたが、私にとりまして教師になった時の初心は、この麗大での最初の中国語の授業です。

長崎県立大学は開学当初



夏休みを利用した海外語学研修・曲阜の孔子のお墓の前で

から中国語教育に力を入れていますが、先年大学が独立法人化すると同時に、経済学部でありながら「中国語による高度なコミュニケーション能力を身に付けた人材の養成」という目標を掲げた二十四単位の特別コースを設け、外部評価の対象になっています。この目標を達成するために、どのような方針を立て、どのような教材を用い、どのような教育をすればよいか、その時に最も参考になったのが麗大で受けた教育であり、課外に賈先生から作文指導を戴いた経験でした。

中国語の実践運用能力を養成するコースであるからといって、安易に会話中心のカリキュラムにしては目標に到達することはできません。発音、文法、読解力、音読力、作文力、これらの上に立った会話力であってこそ、コミュニケーション能力としての語学力といえましょう。そしてそれを背後で支える教養と人格があります。

昨年十二月に、アメリカのブッシュ大統領がイラクで記者会見の最中、記者から靴を投げつけられるという事件がありました。この時ブッシュ大統領は「私は

身をおかすのが上手なので。みなさんの質問に対して」とうまくユーモアで切り返しました。ところが英語で仕事をしている方が「冗談を言ってる場合じゃないでしょうに」と言われたとある人から聞き愕然としました。その人は本当に英語で仕事をしているのだろうか、と思ったからです。自分に対する批判や侮辱にユーモアで切り返す。これは外国では珍しいことではないでしょう。英語を学ぶとは、英語文化を学ぶことであり、英語の論理や表現法を学ぶことであり、アメリカ人の価値観を理解することです。これではアメリカに何年住んでも、どんなにペラペラ会話力が付いても、文化と一体となった語学力の面では、おそらく学習効果を得ることはできないかも知れません。このような話を見聞するにつけ、麗大で学んだことの幸運を感じます。

麗澤教育は、人間尊重の教育であり、総合教育であり、実践教育です。特に研究生生活はもちろん、日常生活においても、何事に対しても、どんな小さな事に対しても、とことんその本質を見極めようとする創立者増してきています。確実に力をつけて全員好成績を収める、という目標を示して、授業と試験のあり方を模索しています。ある時、他のクラスの再履修の学生が私の研究室に来て「友だちから聞いたんですけど、先生の試験は、勉強をすればするほどいい点数が取れるそうですね」と言ったのは哑然としました。考えてみれば当たり前のことですが、それが珍しいもののように受け止められているのでしょうか。外にも複数の学生から「先生の試験は日頃勉強させておけば満点取れますね」とか「先生の試験は教科書さえすれば満点取れますね」と言われたことがあります。因みに私の試験問題はB4判の用紙裏表にびっしり、分量も多くて難しいと学生間での「高い」評価です。こうして基礎力と実践力という視点から、大学生としての学力を軽視することなく教育できるのは、学生の現状に合わせながらも、教育の本質を忘れることなく対応できる視点を持つことができたからだと思います。

博士が本当に偉いと思えるのは、あれだけ精神性の

廣池博士の姿勢です。本質を見る目を養う。これほど大事なことはないでしょう。これが客観的に物事を見る目を養い、冷静に物事を判断する気持ちのゆとりを涵養することになるからです。北京での二年間は異文化環境での二年間でした。日本とは違った論理と価値観で動いている社会に暮らしていると、いつの間にか形にはとられずに、本当に大事な事は何か、本当に価値ある事は何か、ということに考えが向くようになっていきます。これが外国で生活をする真の意義だと思います。学生に留学を勧める最大の理由です。

私は大学時代には論文研究会に入っていました。よく理解できないままに『論文』を読んでいたのですが、おそらく知らず知らずの間に博士の考えに影響を受けたのでしょうか。自分の中国語の学習にも、学生に対する中国語の指導にもそれを感じます。それは『論文』にも散見する「理解↓体得↓実践」という図式です。これを中国語の学習・教育に当てはめると「理解↓消化↓実践」です。大学生の一般的な基礎学力が低下している今日、技術力養成の指導も必要性を

高い指導をされながら、博士から直接指導を受けた方々は、一人の例外もなく驚くほど個性が豊かで生き生きしておられることです。それだけ一人一人の人格と人間性と個性と能力を尊重し、それらを引き出す指導をされたのだと思います。私も常にこのことを念頭におきながら、自分の考えを押し付けられないように、型にはめることのないように、自戒しつつ学生に接することにはしています。その甲斐あってでしょうか、意欲的な学生から対人恐怖症の学生まで研究室に来てくれます。このような学生の独り立ちしていく姿や、少しずつ立ち直っていく様子を見てみると、麗澤教育の有難さを身をもって感じます。

定年まであとわずかとなりましたが、これからも麗澤教育に学び、麗澤教育を一般化し、まねごとながらも、少しでも麗澤教育を実践していきたいと思っています。



〈特集〉社会で活躍する卒業生②

作陶の日々

陶工 稲田雅熙(本名川島正幸)
(第三十一期 イギリス語学科卒)



の美」という考えに感動させられました。結局二十六歳ごろに「ものづくり」の仕事に対してのあこがれが強くなりました。また丁度、その頃に陶工、河井寛次郎の『炎の仕事』という本に出会いその中の、

「暮らしが仕事

仕事が暮らし」

そして、

「なにかもこの一つにかける生甲斐」

などの言葉に共鳴し、京都の清水焼の窯元に弟子入りをしました。「手仕事」と決心し窯元へ行きましたが、肝心な事に私は器用ではなく、また美術素養もあ

麗澤大学三十一期イギリス語学科卒稲田雅熙と申します。現在、信楽で焼き物を作っています。大学を出てから「陶」の世界に入るとは思いもよらないところでした。学生時代にはこれといった職業に対する意識もなく漠然と過ごしていました。卒業後は大阪でサラリーマン、その後、高知で教員見習いなどをしていましたが、学生時代に兄の影響で「民藝」——柳宗悦氏の民衆芸術という考えに出会い、兄が修業していた松本民衆生活館を訪れたりして、合掌造りの建物、その中にある焼き物、織物、木工の調度品など手仕事による、日用雑器の中に決して派手ではなく確かな「直感

りませんでした。それ以上に「陶」に対する思いが強かったかもしれません。職人さんからも、「君は年齢的に遅すぎる」とも言われました。しかし、「仕事が見つけた自分、自分をさがしている仕事」

出来るか出来ないか解らない、そんなことすら考えないでひたすら土を練り、毎日ロクロを回し、窯を焚き、土にまみれての毎日でした。「陶」を目ざす私には足りないことだらけでしたが、その後、さらに「創る喜び」を求めて京都から自然の風土の陶郷の信楽の里に移りました。移ったその年の暮れに、「直感の美」を秘めた円空仏に会うために冬の飛騨高山周辺を巡り、沢山の円空仏に出会うことができ、信楽に帰り「陶地蔵」作りに没頭しました。これまで三十年間で、数万体つくったかと思えます。またガウディーの建築、卵の形の美しさ、銅鐸の凜とした姿、表情豊かな狛犬、鬼など「器」のみだけでなく、いろいろな分野、素材から刺激を受け、作品に活かしています。

学生時代、秋の日、パントック先生と歩いていた時、葉の落ちたイチョウの木を見て、先生が「電流のです。」

また二年前に恩師の田中駿平先生はじめ関係の方々からホームカミングデイに大学の教室で作陶展のお誘いがあり、ありがたく参加させていただきました。語学とは関係のない職業の私に大学からのお誘いは本当に嬉しかったです。当日には理事長先生はじめ学長、また先輩、後輩の方々と出会いすばらしい秋の日を過ごさせていただきました。

大学を卒業してから約三十七年、信楽で作陶生活約三十年経ちましたが、最近ある記事の中で「ものづくり」とは、ただ単に「もの」をつくることではなく「もの」につくり込むことだと書いてありました。大学を出てから「ものづくり」の仕事についている私にとっては、なかなか難しいことですが、学祖の教えの「慈悲の心」を作品につくり込んで行くことかなと思います。

また『炎の仕事』（河井寛次郎）より
「飛ぶとりとめる、絵にしてとめる、
あの音とめる、譜にしてとめる、



大血作陶中

流れた髪だ！」と言われたことも懐かしい思い出です。また先生の「リア王」の英語劇に参加していた、あまり美術には縁のない学生生活でしたが、このポスターを徹夜して描き食堂のドアに貼りましたが、残念ながら後日なくなっていました。学園の四季折々の風景は忘れられません。秋の夜、鈴虫のなく道場で剣道に汗を流しました。恩師、堀ノ内先生の指導を受けたことも本当にありがとうございます。

また、春の宵、友人と食堂に続く桜並木の下で将来の夢や希望、また不安などを語り合いました。はや四十年過ぎましたが、また同じ場所で語り合いたいもの

思ひをとめる、形にしてとめる」

今日まで毎日が創作、どこにいても創作でした。作陶生活を始めたときは全てに手探りで、何を作っても、どのように売ったら良いのか、何も知らないことだらけでした。やっと焼き上げて窯から出し信楽の間屋さんを持って行っても、これは売れないと断られたことも何度もありました。その上信楽の冬は冷たく、厳しい寒さで粘土も釉薬も何もかも凍ってしまいます。外に置いてある粘土に手を入れるとまるでガラスの破片のような氷で手を切ったこともあります。

「暮らしが仕事
仕事暮らし」よ
『炎の仕事』よ



「暮らしの工芸」（高島屋新宿店）

り)
ただこの思いで今まで三十年間作陶生活を送ってきました。

一人で「土」に向かう毎日、楽しくもあり、時には厳しく、また苦しいこともあります。私の器を沢山の人たちが使ってくれていることを思うと素晴らしい仕事だとも思います。

還暦を迎える今になって、長く作陶生活を続けていると作品を作れば作るほど、作り手の品性、人間性が作品に表れてくることに気づかされます。

独立した頃、母からよく「心」が大切だよーと聞かされました。作っても作っても売れない毎日、「心」だけでは解決できないーと聞き流していた時もありました。

三十年経た今、「父母の恩」、まわりの方々の温かい御支援を思い、心より感謝しております。

これからの作陶生活でも麗澤で学んだ「慈悲の心」、そして「報恩」を忘れずに励んでゆきたいと思っています。

現在、東京、名古屋を中心として、高島屋などのデパートで定期的に展示会を催しています。また是非お立ち寄りください。

最後に、これから何年先になるかわかりませんが、「陶」を通じて私なりに、社会に何か貢献できないだろうかーと考えている今日この頃です。

〈特集〉社会で活躍する卒業生③

麗澤という学舎

日本女子大学教授

小山 高正

(第三十二期 イギリス語学科卒)



私は昭和四十八(一九七三)年に麗澤大学イギリス語学科を卒業した。三十二期生である。現学長の中山理先生が二年下にいらした。卒業して大阪大学の大学院に進学し、心理学の勉強をはじめた。心理学を選んだのは、細川幹夫先生からの学問的影響が大きかった。また、谷口茂先生がエーリッヒ・フロムなどの精神分析派の著作を講読に使ってくださったことも道をつけてくれたと思っている。さらに川窪啓資先生がテキストに使ってくださったマックス・ラーナーの著作は社会現象を追求することの面白さを真に気づかせてくれた。しかし、生物学が好きであった私が選んだ心

理学は動物行動学であった。大阪大学では一貫して野生ニホンザルの研究をした。サルの社会や家族を調べながら、社会関係成立の要因解明を目標に邁進したのである。大学院を終え、日本学術振興会の奨励研究員を経て、お茶の水女子大学の助手に採用された。爾来、ずっと女子大学にご縁をいただき、現在は日本女子大学に心理学科教授として勤務している。

麗澤で学んだことが、今日の私のすべてを作ってくれたと思っっている。当時は、全寮制であった。しかも、三人、時には四人の相部屋だったので四年間をそこで過ごすのは一種の修行ではなかったか。いま思い



ゼミ風景

返せば、楽しい思い出も残るのであるが、四六時中家族以外の人間と暮らすわけだから、人間関係に気を使い、知らないうちに十二指腸潰瘍ができ、また知らぬ間に治ってしまったこともあった。しかし、それでもこの四年間が自分を作ってくれたと思っている。先年、ケンブリッジ大学の大学院に留学した心理学の卒業生に、彼女がいたエマニュエル・カレッジを案内してもらった機会があった。ハーバード大学を設立したジョン・ハーバードが卒業した伝統あるカレッジである。緑に囲まれ、冬とはいえ青々とした中庭の芝生が、クリーム色とウエッジウッドのカメオの皿を

思わせるケンブリッジ・ブルーの二色の学寮を一層映えさせていた。その中心にチャペルがある。チャペルを治めている牧師はデインと呼ばれていた。寮内には教員もフェローとして寝泊まりしている。夜の勉強会もあると聞いた。図書館を隔てて、新しい寮舎があり、その横に庭付きの古く威厳に満ちた建物がある。カレッジの責任者マスターの家である。カレッジを一巡りして感じたことは、かつて自分が過ごした麗澤の学舎こそカレッジだったということである。イギリスを代表するケンブリッジやオックスフォードが資金難に苦しめられながらも数百年にわたり綿々と伝えてきたカレッジ制度、それとほぼ同じ学舎に自分もかつて過ごしていたことを実感したのであった。自我没却神意実現の自治制に貫かれた学寮。夜も使える図書館が隣接していた。同じ敷地内に住む教授陣は夜でも訪問を歓迎してくださった。休日にお邪魔して、草むしりや掃除をお手伝いする。先生方は、われわれ学生と生活をともにするような環境の中で一人ひとりの学生の人間性を育ててくれたのである。エマニュエルの

中庭にたちながら、恵まれていた自分の学生時代を思い返し身震いしたのであった。その後の心理学における恩師たちとの出会いが素晴らしかったのも、麗澤という学舎に身も心も育んでもらったおかげである。そのときお世話になった先生方にご恩返しができるのであれば、いま私が面倒を見させてもらっている学生の人ひとりに人を育てる心を植えつけることであろうか。まだ、幾ばくも実行できてはいないのだが、少なくともそれを目標にして毎日を過ごしている。

いま勤務する日本女子大学に心理学研究室ができたのは古いのだが（なんと最初に女子大に來られた松本亦太郎先生は日本の心理学創立者のお一人である）、学科として独立したのは二十年ほど前で、卒業生もまだ若い。ときどき、彼女らに話しに来てもらうのであるが、異口同音に「学生時代にもっと勉強をしておけばよかった」という。しかし、それについては私も全く同じである。麗澤大学では当時のイギリス語学科にいたのだが、もともと英語が苦手だったのおしゃべりも得意でなかったので、会話の授業には全くついて

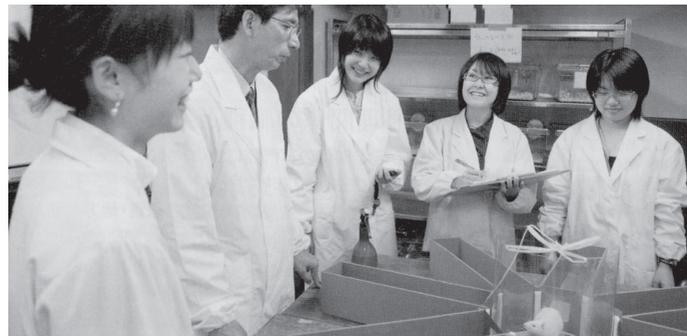
いけなかった。さほど努力もせずに好きな本を読んだりして四年間を過ごしてしまった。今は研究者として海外に出かけて発表をしたり、英語で論文を書く機会も多い。その都度、麗澤時代にもっと本気で英語の勉強をしていたらよかったと思う。英語を勉強するのに最適な環境にいたのに十分活用しなかった怠惰な自分を恥じるのである。しかし、国際学会に参加するをおっくうがらない、まだ辞書を引き引きではあるが毎日英語を読む、学生が書いた英語論文に手を入れるなどのことが何とかできていたのも麗澤で四年間勉強させていたのだとおかげなのである。「もっと」と望むのは贅沢かもしれない。インターネットの時代、ますます英語の重要性が増している。学生時代だけではなく、日々精進しなくてはならないだろう。最近、IBMにいた人で今はユニバーサル・デザインの会社を起業し経営する女性をお招きする機会があった。彼女がIBMを例にとってこう言った。「IBMも中国へのウエイトが大きくなったので、英語と中国語ができる人材を望んでいる」。すでにそういう時代なのだ

と実感した次第である。今麗澤に学ぶ諸君もそういう目標を持って進まれるといい。誰でも具体的な目標を持ってそれに向かって努力する。今こういう人材が求められていて、その目標に近づけば、不況の時代でも自分のやりたい仕事ができる。世に求められる人間になるため、己の知性と人間性を磨く。麗澤の学舎はそれをかなえてくれる場所である。

最後に、私の研究室で行っている研究を少し紹介したい。動物心理学をやってきたので、研究室でもネズミを飼っている。学習実験や行動観察の実習に用いているが、今年入って来た大学院生は実験用ネズミを野外のオープン・フィールドに放して子育てをさせ、その子どもたちの知的能力が増進するかどうかを見ようとしている。豊かな環境が知的能力にどのような影響を与えるのか、エンリッチメントの研究である。もう一人は私が長年やってきたサルを用いた研究をしてくられていて、妊娠中に摂取された内分泌攪乱物質、いわゆる環境ホルモンが、子どもの知的能力全般に与える影響を見ている。プラスチックの材料であるビスフェ

るのは大変な仕事である。研究のテーマを見つけて、遂行のための資金を調達する、学会や研究会で発表させ、論文をまとめる。そして、就職先を世話するのである。麗澤「太陽天に掛かりて万物を恵み潤す義なり」の心を受け継ぐ人間として、人を育てる仕事に就けたことは幸せであった。その学舎で指導くださった多くの先生方に、そして四年間至らぬ私を支えてくれた諸先輩ならびに同輩の皆さんに心から感謝申し上げます。次第である。

ノールAは女性ホルモンに似た物質で、ネズミなどの実験から高濃度の摂取が脳や生殖生理に影響を与えることがわかっていたが、極微量の低濃度でもサルの子どもにも影響を与え、脳のメス化を引き起こすことを示すことができた。またダイオキシンに含まれるポリ塩化ビフェニール、いわゆるPCBについても研究が進んでおり、子どもたちの社会性の発達に影響を与えることがわかってきた。これらの結果は、現在英語の論文としてまとめられていて、近いうちに世に知られるところとなるだろう。学生を育て



ラット実験風景



「麗澤」という「誇り」

(有)ファイブプランニング代表

山本龍太郎

(第五十五期 国際経済学科卒)



「龍太郎、大学に行くのか？」

私が麗澤瑞浪高校在学中に恩師の一人に麗澤大学進学
の報告をすると、驚きの顔でこう言われた。

無理もない。高校の後半は進学に向けて勉強をする
ようになったものの、麗澤瑞浪中学校時代には、勉強
は二の次で音楽を聴いたり、雑誌を読んだり、友達と
遊んだり、やんちゃをしたりと、周囲を困らせる生徒
だった。

「個性尊重」と言う麗澤教育の上辺だけを振りかざ
し、根本を探索せずに過ごした毎日。それでも中学か
ら大学、モラロジー専攻塾も含めれば、十二年という

麗澤教育に触れ、少しぐらいはまともになったのでは
ないだろうか。

麗澤教育を第一とした両親の存在は欠かせない
が、大学進学時に推薦してくれた先生方にも感謝して
いる。

英語が不得意だった私だが、外国旅行や中学校高校時
代に聞いた恩師の話から、広い世界にとっても興味があ
った。ちょうど麗澤大学に国際経済学部（現・経済学
部）が新設されると聞き、急いで推薦の申し込みをし
た。

体育、美術、音楽などの成績が良かった私は、それ

らに助けられ特別推薦の基準をクリアし、寮生として
麗澤大学に進学。新しい学部だが、寮に入ったお陰で
先輩や他の学部の人たちとの出会いが多くあり、今で
も交流が続いている。サークルが少なかった為、友人
とサークルを作り、大学以外にもいろいろな活動をし
た四年間だった。いや、サークル活動や大学祭のよう
な課外活動の方に力が入っていた四年間と言った方が
正しいかもしれない。

もともと学業に専念できる性格ではないので、学園
祭があれば、学業そっちのけで準備。サークルの仲間
や寮の仲間と朝から夜中まで大騒ぎすることも日常だ
った。一年一学期という大学生活のスタート時に、寮
祭でテントを燃やすという火災事件を起こした事で四
年間、大学のブラックリストにも入っていたのではな
いだろうか。

大学時代を振り返って活字にすると、どうしようも
ない学生だったな、と反省ばかりだが、現在の私を支
えてくれている経験、そして生涯の友を作ることが出
来た事は、私が麗澤大学で得た大きな財産だ。

麗澤大学の進学を希望した第一は「知徳一体」を基
本としたモラロジーの教育だ。モラロジーの講義の
他、大学に隣接するモラロジー研究所で夏に開催され
る全国モラロジー学生研究会にも四年間参加した。

学業だけでなく、高い道徳の重要性を教えて頂いた
ことは、学業が苦手な私にとって人間性を磨くという
目的ができた。同時に社会貢献をする為には、学業が
大切だということにも気がつき、苦手な学業に挑戦す
る意欲にもなった。

卒業論文はゼミの教授が厳しかったこともあり、大
変だった。引用はすべて削除され、自分の意見を何度
も問われ、自分の意見を見つける為に、さらに勉強が
必要だった。四年間真剣にやっつてこなかったツケが回
って来た感もあったが、それが私の勉強への楽しさを
見つける機会にもなり感謝している。

こうやって少しずつ勉強への楽しさが湧いた大学四
年の夏、進路の一つとして考えていたモラロジー専攻
塾に合格。二年間麗澤大学に隣接する地でお世話にな
った。

モラロジ専攻塾卒業後はホテルへ就職。これは私の両親が伊豆で保養所を営んでいた為、その修行になればという名目もあったが、一度は大都市東京で働いてみたいという気持ちが大きかった。

しかし、中学から麗澤という恵まれた環境で育った私には、東京での仕事、人間関係、さまざまなところで悩み、葛藤し、半年でホテルを退職してしまった。

貯金も僅かで東京に出た為、風呂なしトイレ共同、一軒家の一部屋を間借りのような形で生活をしてきた。生活費があまりかからない為、気楽に過ごしていたが、気がつくとも貯金が底をつき、ハンバーガー（当時六十円）に水をもらい、食をつないだこともあった。

しかし、あまり貧しいとか苦しいとは感じなかった。よく言えば前向き、人から見れば楽観的、のんきで、悪く言えば先に起こりうる危機をあまり考えないのが私の性格。その性格を天が助けてくれるかのよう

に東京では恵まれた道を歩んできた。

麗澤の寮生活で培われた社交性とも言うのだろう

を任される話が来たり、空いた時間でモデルの仕事もさせてもらったり、編集の仕事から、時間の融通がつきやすいライターの仕事に移してもらったり。朝から夜中までフル



大学時代の恒例行事「富士山登山」

に自分を使うことができる毎日となった。そんな中、大きな転機となったのが自分の会社の設立だ。それまで飲食店の開店や販売の企画に多く携わり、ライターの仕事でも飲食店やイベント

か、隣の部屋の人はすぐに仲良くなり、いろいろな話をした。私がホテルを辞めたこと、マスコミに興味があること。隣の人の話もよく聞いた。役者で、どんな舞台に出ているのか、彼女のこと、そしてどんなバイトをしているか。

そんな事を毎日話しているうちに、隣の人のバイト先を紹介してもらえることになった。興味があつた雑誌の編集だ。その社長がまだ若い人だった事も大きな刺激になったのだが、名高い雑誌を数誌手がけ、今でこそ携帯電話でのメールやネットは当たり前前だが、当時はまだiモードという言葉すらなく、一切出回っていないかった携帯によるネットのコンテンツも作成していた。大学一年生の時から当時最先端だったパソコン技術を学んでいた為、第一線の基礎知識があつたことが幸いした。時代の先を読み、学生に情報やITなどの教育をしてくれた大学に感謝している。

そこから先は出会いに流されたというか、大切に出来たというか、いろいろな事を経験させてもらった。ホテル時代の友人から、親が経営する会社の企画

トの取材をし、なによりも実家がサービス業だつたという事もあり、いつしか自分のお店を持ちたいという気持ちが出てきた。

そして東京に出て五年、二十代最後に来て自分のお店を開店することができた。開店時には麗澤の同級生も手伝ってくれた。飲食業経営は厳しい業界だが、大学祭で出展した時の楽しい思い出にも助けられた。それから六年間が経とうとしている。昨年は支店も開店することができ、新店も麗澤の同級生が手伝ってくれている。

自分の心身を培ってくれた家庭教育と、麗澤で過ごした十二年間の教育の中心にモラロジがある。私は現在、その恩に少しでも報いることができればと東京都のモラロジ青年クラブで役につかせて頂いている。来年度は東京ブロック及び東京都モラロジ青年クラブの会長という役も任せて頂くことになった。大学時代の部長経験も生かせる機会となりそうだ。

会社の経営を通じ、未熟ながらもいろいろな経験をさせて頂き、「知」は日々増えている。「知徳一体」を

基本とする麗澤教育に学んだ人間として、「徳」の分量も増えるよう努力したい。今私の不安と言えば、大きな失敗をしていない事だろう。偉大な経営者や力がある先輩の話を聞くと、若い頃に何かしらの失敗や挫折を経験している。いつ訪れるとも知れない問題にも備えるべく、また麗澤の卒業生の名に恥じない人間となれるよう、これからも努力を怠らない人間を目指したい。



〈特集〉社会で活躍する卒業生⑤

私と麗澤教育

本田技研工業株式会社経営企画室

岡田 あずさ

(第五十五期 中国語学科卒)



この度「社会で活躍する卒業生」という特集の中で、麗澤時代の思い出と現在の状況を書き寄せるようご依頼を受けました。名だたるOB・OGの皆様がいらっしゃる中、お恥ずかしい限りですが、今の私がいるのも麗澤大学のお陰ですので、簡単にご紹介させて頂きたいと思います。

さて、日本全国、星の数ほど大学はありますが、先生方が学科の生徒の名前と顔はもちろんの事、強み・弱み・各人の性格まで含め、全てを把握しているらっしゃる大学はそうないと思います。私が卒業した麗澤大学は、そういうアットホームな大学でし

た。

私は今、自動車メーカー「Honda」の経営企画室で働いております。一九九六年に入社した後、本社の海外営業部勤務、五年間の香港駐在、そして現在の経営企画室と、自分の描いたキャリアパス・夢を次々と実現させる事ができ、お蔭様で充実した毎日を過ごす事が出来ております。実は、こんな素敵な毎日が送れているのも、麗澤大学の先生方・就職部の皆様の大胆かつ細やかな心配りのお陰なのです。

というのも、私が就職活動をした時期、Hondaから麗澤大学へ届いていた推薦求人「男子学生に限

る」というものでした。前々からグローバル規模で長きに渡り仕事がしたいと考えていた私にとってHondaは大変魅力的な就職先であり、「男子学生に限る」と限定されていてもそう簡単には諦める事が出来ませんでした。そこで、無理を承知で、就職部の方へ「女子ではあるが応募してみてもらえないだろうか」とお願い致しました。普通の大学であれば門前払いになりそうなお願ひですが、就職部の方がどう調整を取って下さったのか、願ひが叶い面接試験を受ける事が出来ただけでなく、無事採用合格となりました。また、働きかけをして下さったのは、就職部の方だけでなく、先生方もいろいろとご尽力して下さいた事を、卒業後十年を過ぎた、つい最近知りました。学生個々の思いを汲んで、ここまで丁寧に対応して下さいた大学は、たぶん他にはないのではないかと思います。

そんな麗澤大学での在学中には、外国学部中国語学科で実り多き四年間を過ごしました。

入学後すぐに開始されたのが「発音練習」です。この方法は大変すぐれていると思います。そして三年生になり、台湾の淡江大学へ半年間の留学を致しました。「発音練習」「ラインアップ」で鍛えた中国語が、現地で通用するのは大変嬉しいものでした。淡江大学の学生三名との同室で、台湾の素敵な所を教えてもらったり、恋の相談をしたり、友人関係を築けたのも良い思い出です。台湾は何を食べても本当に美味しく、帰国時までにご飯体重増になってしまったのは困ったものですが。

留学から戻り、三瀧先生の中国語論説体読解力養成授業「レベル」が始まりました。この講義は人民日報の記事が難易度に分けて出題され、それを日本語に翻訳、先生が丁寧にチェックされ、その結果によってレベルが上がっていくという内容です。この講義で読解力を養えたお陰で、会社に入ってから中国語の契約書を読む際、そう違和感無く対応でき大変助かりました。

上記「ラインアップ」「レベル」のような、工夫を凝らされた講義内容のお陰で、中学・高校で学んだ英

存知の通り、中国語は発音が何よりも難しく、基本の発音がマスター出来ずに挫折する方も多い言語です。それを克服する為に、夕方になるとボランティアの先輩方が新入生へほぼマンツーマンで、「ボ・ポ・モ・フォ……」と叩き込んで下さいました。結構厳しい指導だったのですが、先輩達の話を聞くのもおもしろく、学生会館の2Fへ毎日せせと通ったのを覚えていきます。

またもう少ししたつと、「ラインアップ」という三瀧先生の講義が始まりました。これは反射的に中国語が口から出てくるよう工夫された授業で、例えば、先生が日本語で「コーヒーがとても高い」と出題されたら「珈琲非常貴」と答え、そのスピードを競いあうというものです。この授業のお陰で中国語を口にする事に抵抗がなくなり、また友人同士で競いあう事でたくさん例文を頭に入れる事が出来ました。ある一つの言語を習得する為には、ある程度までは四の五の言わず単語・例文を暗記する事が求められますが、その為に

語に比べ、中国語は比較的すんなりとあるレベルまで習得できたように思います。また共に学んだクラスメート達も、海外生活が長かったり、外国語を口にするのが全く苦にならない強靱なハートの持ち主達が多かったようで、良い刺激をたくさん受けました。同級生には、卒業後は、ドイツのNGO法人THF（国際文化発展公益基金会）で、チベット建築の保存・修復活動を展開している平子豊さん、神戸青年会議所（JCL）で広報戦略委員として活躍されている近藤弘人さんなど、一言では語りつくせない強い個性の面々が揃っておりました。卒業後はな



かなか会う機会もありませんが、風の便りで、同級生の活躍ぶりを聞くことも多く、嬉しい限りです。

また大学時代経験した事で、今の仕事に役立っている事はあげるとすると、私の場合は、いろいろな国を旅した

事、また様々な職種のアルバイトを行った事の二つです。大学時代は、夏休み・春休みと比較的長いお休みがあるので、その時間を使って、日本国内、アジア・欧州・中南米と旅して回りました。会社に入ってから、中国の工場で生産したオートバイを世界中に輸出するという仕事を担当した時期がありますが、学生時代にいろいろと回っておいたお陰で、その市場のイメージが沸きやすく仕事をスムーズに進める事ができました。

良く言われる事ですが、社会人になってからは、お金はあっても時間はありません。もし麗大生でこの記事を読まれている方がいらしたら、学生の内に、専攻言語の国だけでなく、世界中を回っておく事を強くお勧め致します。またアルバイトも学生のうちにいろいろな職種を覗ける良いチャンスです。今のご時勢ではアルバイトも少ないかもしれませんが、自分の興味のある会社・職種の実態を、アルバイトという形を通じて、中から実体験する事が出来ます。雑誌やインターネットで就職活動するより、よっぽど実態

を知る事が出来ます。

自分なりにには精一杯充実した学生生活を送ったつもりでしたが、社会人になった立場で振り返ると、もっとこうしておけば良かったという事がいろいろ思い浮かびます。今一番悔やんでいるのは、中国語の習得レベルです。二年生の留学時までで基礎的な生活レベルは話せるようになった為、そこで慢心し、それ以上の努力をあまりしませんでした。ところが、中国語の専攻で採用された者に仕事で求められるレベルは全く違います。会議通訳、公式文書の作成等、毎日冷や汗ものです。まだ間に合う皆さんは今のうちに頑張っておいて下さい。

子供も産まれ、なかなか南柏まで足を伸ばす時間が取れませんが、麗澤大学卒業生である事を誇りに日々成長していければと思っております。今後とも麗澤の発展を陰ながら応援しております。

〈特集〉社会で活躍する卒業生⑥

現在いまに活きる麗澤での学び

(株)テクノスター 三浦一壽

(第五十六期 国際経済学科卒)



五十六期卒業の三浦一壽です。現在、「株式会社テクノスター」で営業を担当しています。お客様でお客様はもちろんのこと、会社の同僚の方々にも可愛がって頂いています。

実は、この機会に自分自身を見つめ直してみたのですが、何か特別なことをしているとは思えません。それでも、皆様から愛され、信頼されて日々を過ごすことができるのは、麗澤で教えて頂いた多くのことが身になっていくからだと思います。私も、在学中に先輩方からいろいろと聞いていましたが、自分で働くこと改めて実感することが多くあります。当時は、社会人と

してのマナーであるとか、仕事上のテクニカルなことなども教わりましたが、今の私は「感謝」「素直」「自信」の三つを実感しています。

まず「感謝」についてですが、私の勤めているテクノスターでは構造解析用シミュレーションソフトを自社で開発・販売をしています。営業とは言え、お客様と商談以外にも、技術的な打ち合わせをすることがあります。例えばあるお客様から「Aということがしたいけど、テクノスターさんでは作ってもらうことができますか？」といった質問に対し、技術的に難しい場合には、私一人では判断できません。その際には、技

術者・開発者を集めて、打ち合わせをし、その結果をお客様に提案することになります。

私の場合は、こうした例に限らず、技術者・開発者がいなければ、仕事が成立しないので、常日頃から彼らに感謝の念を抱いて仕事をしています。もちろん、感謝を表現することも大切なことだと思っています。特に、私は前職でプログラマーの経験もあり、テクノスターに入社してからは三年半技術者として過ごしました。その経験から、どのように話をするかで、技術者・開発者に前向きに仕事に取り組んで貰うかが、プロジェクトの成功を大きく左右すると感じています。

ここで現職に至った経緯を簡単にまとめました。私は、元々麗澤高校時代から文系で、麗澤大学へ進んでからも歴史人口学、大学院へ進んだ時に理論経済学を勉強しましたが、物理についてはほとんど勉強したことがありませんでした（高校一年生の時に試験で四点を取った記憶があります）。それにもかかわらず、構造解析用シミュレーションソフトの会社に転職したの

ら、この業界のことを勉強しました。何も知らない私を「イロハ」から教えて下さったのですから、本当に有難いと思っています。もう一つネックだったことは、英語力の無さです。もともと大学院を中退するきっかけは英語力の無さだったのですが、テクノスターの開発者は大半が外国人（インド人、中国人、韓国人）だったのです。このままでは業務に支障があると私も周りの人も思っただようです。

ところが、日々の積み重ねというのは相当なもので、（私もそれなりに努力をしましたが）その結果、入社三年後の夏には、アメリカのフォードで英語を駆使し、ソフトウェアのトレーニングをしていたのです。もちろん、質疑応答などにも答えました。本当であれば、社長も一緒に行く予定でしたが、スケジュールが合わず、私だけが一日先行して渡米しました。社長はトレーニングの途中で合流したのですが、「入社した時には、英語は全く駄目だったはずなのに、フォードでしかもほぼ全員が博士号を持っている連中を相手に、堂々と説明し、質疑に応えているのは、本当に



学生時代（右から2人目）

は、社長が知り合いだったというただ一点です。この時にも社長には「私は文系ですから、解析のことは何も分かりませんが、それでも良いのですか?」と言ったのですが、「一から教えるから気にするな。良いから来い」とのことでした。私もその言葉を鵜呑みにして入ったわけではありませんでしたが、今から考えると普通ではなかなか出来ない決断だったと思っています。この時は、前職でプログラマー（SE）には不向きであったことを実感していたのと、社長の人柄に惹かれていたのが大きな後押しになったのだと思います。

当然ですが、入社してみたものの、やはり右も左も分かりません。社長は「一から教える」と言っていました。自分が教えることもなく、一ヶ月ほど先に入社した部長と先輩の営業にいろいろと教わりながら人は成長するものだ」と、大変感激をしたそうです。もつとも、私とすれば、周りに助けてくれる人がいないのであれば、自分で何とかするしかありません。余分なことは考えず、ひたすら一生懸命やった結果でした。私が営業になったのには、会社の事情によりますが、「この出来事がきっかけだった」とある時社長が話してくれました。つまり、私なら営業になっても、今以上の成長をしてくれると期待してのことだったようです。ある意味、私の三年間の成長を評価して貰ったのだと思っています。

次に「素直」についてですが、これも「感謝」と同様、社会では重要なことだと実感しています。テクノスターに入社してからは、仕事のこと、業務のことは周りの人の方がいろいろと良く知っていますし、お客様の方が専門家ですから、自分は本当に素直に耳を傾け、知識や技術を身につけることができただのだと思います。この「素直」も私を高く評価してくださっている方々に良く言われることです。自分の過ちはなかなか認めにくいものです。ただ、私はこの業界では素人

だという認識もありますので、常に一歩引くことができずきました。

この姿勢は今でも変わることなく続いています。なぜなら、奥も深く、幅も広い分野のため、まだまだ知らないことも多いのです。何より、現場にいるお客様の方が、実務もしていらつしやるので、その経験にはどうやっても勝ち目がないのです。そのことを常に念頭に置いて話をする事、「お客様という言葉には一理有り」「先輩の言葉には一理有り」「後輩の言葉にも一理有り」と考えることで、「素直」に話を聞き、その上で自分の仕事を進めていくことができると考えています。

三つ目の「自信」というのは、とても難しい存在だと思っけています。先ほどの英会話の例ではありませんが、日々の積み重ねや、自分の経験によってのみ自信は深くなるものだと実感しています。私には今でも時々先生方の言葉が聞こえるのです。特に「自分には難しいのではないか?」「本当にできるのか?」などと迷った時に、「自分を過小評価するな!」と私を奮

立たせてくれます。また、会議でみんなの覇気がなく、黙っている時間が長い時に「沈黙は豚なり、ただ黙っているなら豚と一緒にだ、考えて、そして発言せよ」とお叱りの声が届きます。自信はすぐに得られるものではありませんが、困難にチャレンジすることで、その結果を正面から受け止め、自分の糧にすることで少しずつ得られるのだと最近ようやく感じています。まだまだ過信するほどの自信を得ているわけではありませんが、過信することの無い様、「感謝」、「素直」も大切にしていきたいと思っています。

最後になりましたが、一〇〇年に一度の不況とも言われている昨今の経済状況ではありますが、どんな状況下でも自分を見失わず、麗澤で学んだ「感謝」・「素直」・「自信」を携え、社会に貢献できる人間になるべく今後も努力していくことが、お世話になった麗澤への恩返しかと思っています。

〈特集〉社会で活躍する卒業生⑦

麗澤で得たこと

日本時事通信社台北支局

藤原扶美

(第五十七期 中国語学科卒)



台北に住むようになって六年が過ぎました。転職を経て、現在は希望していた翻訳の仕事に就いています。中国語の経済関連の記事を日本語に翻訳するのが主な仕事です。以前から身近に感じていた台湾ですが、恥ずかしながら、経済記事を多く読むようになってはじめて、台湾の製造業が思っていたよりずっと日本とつながりが深いことなどを知りました。また、「言語は生き物」とはよく言ったもので、中国語の新語、流行語もどんどん生まれています。これに対応するには、中国語の勉強以上に、日本のニュースや情報にも注意していなければ動きません。……と偉そう

なことを書きましたが、本当のところ、やればやるほどに自分の文章力の足りなさや、知識の少なさを感じていて、反省、反省の毎日です。至らないながらも、希望の仕事をしている私ですが、ここに来るまでには麗澤での学生生活で得た経験が欠かせず、麗澤の先生、先輩、友人、後輩に支えてもらったことが山のようにあります。

今でこそ、麗澤大学を卒業したから今の自分があるのだと、胸を張って言えますが、実を言うと、麗澤は第一志望の大学ではありませんでした。第一志望がダメだと分かったときに、浪人という選択肢も考えまし

たが、もう一年受験勉強をするよりは、やりたかった中国語の勉強を進めるほうがマシ。そんな消極的な考えで麗澤大学への入学を決めました。今思えば、ずいぶん失礼な考え方ですが、そんな思いは、入学後一カ月もしないうちに消えました。

授業が厳しい……。厳しいせいなのか、留学を経た先輩方は中国人の先生とペラペラ中国語で会話している。「この学校にいれば、私もああいう風になれるのかな」そう思うと、入学してよかったと感じるようになっていました。繰り返しですが、授業は厳しいものでした。一年次から専門の演習がみっちり組まれており、少人数ゆえ、先生方は出席を取らずとも学生の出欠を把握できるといって逃げ場のなさ。(笑) 入学してすぐの一カ月間は、ひたすら発音練習をしていたことを覚えていきます。中国語の発音では、普段使わない顔の筋肉を使うため、その頃は、頬や口元がつりそうでした。また、容赦ない中国人の先生の授業で、「不对、不对。(違う、違う)」と、ダメ出しされ続けたことも、今となっては楽しい(?) 思い出です。発音が

間違っていると、全く通じなくなってしまう中国語ですが、おかげで、今、台湾で生活していても、発音で苦労することはありません。学年が上がっても、演習のみっちり具合は変わらずで、講読の予習復習、レジュメの作成など盛りだくさんでした。時には、他大学の友人と比べて授業の大変さに不満を感じたこともありますが、もちろん、授業をサボったこともありましたが、全ては予習復習をきちんとしていたと、とても言えません。最低限の授業をなんとかこなしていただけです。それでも、よく聞くような「遊んで過ごす四年間」とは違う充実した大学生活でした。厳しい厳しいと書いていますが、それだけでなく、その分、先生方との距離が近く、友人たちと濃密な時間を過ごすことができ、「私は麗澤で学んだ」と誇りに感じることもできると思います。出深い四年間になりました。もともと好きで選んだ中国語ですが、厳しい授業でちゃんと学んできたという自負が、「中国語関連の仕事に就きたい」と思えるに至った基盤になっていることは確かです。

中でも、強烈な体験として刻まれているのが三年次に行った半年間の台湾留学です。この半年は、実は机に向かって勉強した記憶がほとんどありません。むしろ授業をサボった思い出ばかりがよぎります。しかし、消極的だった当時の私に欠けていた、「ダメもとでも行動してみる」という体験を多く積めた半年でした。せっかくの海外生活。バイタリテイのある友人たちは、どんどん出かけていってしまっています。いつも「金魚のフン」だった私は、うかうかしていると置いてけぼりになりかねませんでした。そのうち、「自分で動かなければ何も始まらない」ということに気がつき、多少無理をしても日本人の友人に頼らず活動していくようにしました。最初の頃は、一人で食堂に入るのもオドオド状態。注文システムが分からなかったり、品書きを見ても読めない字があつて食べたいものを注文できなかったり……。それでも、会話練習の友達と話をしたり、サークルに参加したり、行動範囲が広がるにつれて、慣れも手伝ってか度胸がついてきました。そうこうしているうちに、台湾人の友人と過ご

す時間を多く持てるようになりました。もちろん、自分の中国語が通じず、台湾人の友人が言っていることが理解できず、悔しい思いもたくさんしました。むしろ、通じなくて絵を書いて説明してもらったり、漢字を書いてもらったりしたことの方が多いくらいです。しかし、それが留学後、卒業後のバネ、モチベーションにつながっていることも事実です。この留学経験は、一緒に行った同級生の間でももちろんですが、年の違う先輩や後輩との間でも共通の話題として、今でも盛り上がるのがまた楽しいところです。

麗澤大学で得たものは、今までに書いた通り、充実した教育体制による語学力です。これに加えて、先生方や先輩、後輩たちとのつながりも大きいと思っています。これは、在学中にはあまり感じなかったことですが、卒業してから本当に身にしみてありがたいと思っ

ていることです。卒業後すぐに勤めた日本の会社では、麗澤大学卒の先輩が活躍されていました。その実績があつて、氷河期といわれた就職難の時期に、私が雇ってもらえたと言えるのですが、その先輩には、入

社後も大いに面倒を見てもらい、互いにその会社を退職した今でも仲良くしてもらっています。また、当時は、仕事で大学を訪問することがあったのですが、厳しい社会人生活でヨレヨレになっていた私を、先生方や職員の皆さまに慰めていただいたことを、今もよく覚えています。このほか、在学中のみならず、今でもお世話になり続けている松田徹ゼミでは、現役生のコンパに混ぜてもらうこともあり、同じ時期に大学になかった後輩たちとも交流させてもらっています。特に気の合った後輩とは、日本でも、台湾でも一緒に遊ぶ仲になっています。もちろん、先生とは今でも頻繁に連絡を取らせていただいています。

台湾に来て知ったのは、海外で活躍している卒業生の多さです。台北で、日本人のお客様と商談をしていて、よくよく話をしてみると、実は麗澤の先輩だった、ということが本当にありました。そんな先輩の紹介で仕事広がることも。また、仕事抜きでの付き合いも活発で、現地OB会の台湾麗澤会として、不定期に集まっています。特に昨年は、家族も含めての忘年

会（日本の暦では新年会の時期でしたが）を開催。子どもさんの参加もあり、とても賑やかで楽しい会になりました。ちょうど当日が、私の誕生日だったため、先輩方がサプライズでケーキを用意して下さり、皆でハッピーバースデーの合唱！ 本当に嬉しい誕生日でした。学科、年齢問わず、「麗澤出身」というだけで、一緒に盛り上がれて、プライベートな相談や何気ない話ができる場というのは、私にとっては、とても貴重でありがたい場です。

振り返れば、就職、転職、台湾生活……、「現在の私」は全て麗澤で得たことがベースになっています。今回、この原稿を執筆するに当たっては、書き上げられるかどうかとても不安に思っていたのですが、「麗澤出身」という誇りを改めて感じるよい機会になりました。ありがとうございました。

〈特集〉社会で活躍する卒業生⑧

多文化多宗教社会で

求められる「互敬の精神」

麗澤中高等学校教諭

北岡 希久朗（旧姓：高橋）

（第五十八期 国際経営学科卒）



私が麗澤で得た最も大きな財産は当時麗澤大学客員教授として集中講義をしてくださった犬養道子先生との出会いでした。これは私の人生を一八〇度変えた出会いだったと言っても過言ではないと思います。コソボなどで命を懸けて難民救済にあたっていた彼女と接するなかで私は様々なことを考える機会を得ました。私はそれまで生きてきて「人は何のために生きているのか」という大きな命題について考えた事もなければ、「世界の中での自分の役割や使命」などについては、これっぽっちも考えた事がありませんでした。これらをすべて変えてくれたのが犬養先生で

した。彼女の存在（プレゼンス）は常に私の意識のなかにあり、卒業後も当時の集中講義で自分の中に芽生えた疑問や課題が私を離れることはありませんでした。やがて私自身「宗教や文化などの異なる背景を持つ人同士がどうすれば違いを乗り越えてお互いを理解し、よりよい関係を築くことができるか」を考えるようになりました。その答えを自分の心事（こころづかい）の実践によって見つけ、次世代を担う子供達に伝えることが自分の役割であり使命だと考えるようになったからです。私は答えを探すために麗澤中高等学校で勤務を始める前に一年間ヨーロッパを訪問して、犬

養先生から紹介頂いたフランスにある超宗派のキリスト教の共同体「テゼ（T E Z E）」で約一ヶ月半の修道生活を送りました。そして、その問いに対する私なりの答えに到達することができたのです。犬養先生との初めての出会いから六年目のことでした。今日はそのことを「私が麗澤教育から学んだこと」として皆様にお伝えしたいと思います。

テゼとはフランス南東部にあるキリスト教の教会一致を目指した共同体のことです。ここはプロテスタントとカトリックの和解の場としてはじまった場所で、現在ではプロテスタント・ルッター派のチャペルがあり、カトリックのチャペルがあり、オーソドックスのチャペルもあります。そして、毎週キリスト教徒を中心としてイスラムからユダヤに至るまでの青年男女、一万人を超える若者が集まります。テゼに最初に来た故ブラザーロジェは「共存というのは、お互いがいかに違うかということをまずはつきりと、相手への尊敬を抱きながら見てとって、兄弟愛を以て助け合いつつ生きることからはじまる」と述べていますが、テ

ゼでは私が滞在している間だけでも少数でしたがユダヤ教徒やイスラム教徒、仏教徒の姿を見かける事がありました。そして、共同体の中で生活をされているキリスト教徒の方々は神道の国「日本」からきた私をも温かい心で迎えてくださりました。生活をする中で、テゼはキリスト教の異なる宗派間だけでなく、まさに世界中の人達が違いを乗り越えて一つの家族としての意識を持てる春のように暖かい共同体だと私は感じました。

テゼでの生活は至って簡素（シンプル）で、至るところに静寂（サイレンス）が溢れています。そして、この特別な環境が背景を異にする人達と関わっていく上で大切な心事を私に教えてくれました。テゼでの生活は一日三度の祈りと聖歌の時間、聖書の勉強会、共同体を支える仕事とその中心です。このシンプルな生活の中で私は三十二カ国から来た異なる国籍の若者と出会い、互いの国について話し合ったり、心の悩みについて話し合ったりする時間を持つことができました。また、夜中に星屑の下を歩きながら互いの人

生について語り合うこともありました。そして、共にキリスト教の聖歌を歌ったり、教会で共に祈ったりする時間を持つこともできました。このようなテゼでの生活を重ねていくうちに私はいつしか互いの違いを超えて同じ家族に属する者としての一体感を感じるようになっていました。帰国の迫った時期に私はあるウクライナの友人から「あなたはキリスト教徒ではないのに、私はあなたの存在を本当に近くに感じる。」という言葉をかけてもらいました。とても感動的な言葉で今でも心の中にその時のうれしさが刻まれています。私が感じていた事を私の周りにいた人達も感じてくれていたのです。この様に私は目に見える形の違いを乗り越えて、互いに合い通じる領域にまで歩み寄ることができていたのです。

私は何がこのような一体感を生み、異なる背景を持つ人達と自分の心と心をつないだのが最初はわかりませんでした。しかし、その原因を自分自身の心事に求めていくうちにやがてそれが何かわかるようになりました。その答えの一つは「私達は同じ人知を超えた

存在に繋がり、同じ一つの家族に属しているという揺らぐ事のない信念」でした。山に登頂する道が幾つかあるように真理の探究をする道も一つではないということを私は麗澤教育の中で学んでいましたが、同じような事を私もテゼにいる時に教えて頂きました。それは六世紀にパレスチナに住んでいたキリスト教徒の言葉で次の様なものでした。「円を想像してみてください。その中心は神です。円の半径とは、人々のさまざまな生きる道です。神に近づきたいとあこがれる人が円の中心に向って歩くとき、神に近づくと同時にお互いが近づくことになりま

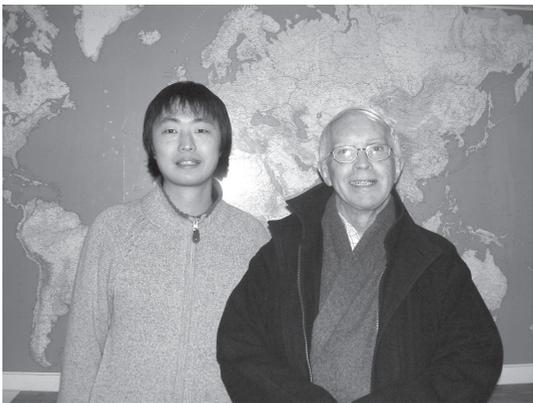


テゼに集まった青年達の前でのスピーチの様子

す。神に近づけば近づく程、お互いが近づくのです。また、お互いが近づけば近づく程、神に近づくのです」。この時代を超えた言葉は「私達が違うものを違うものとして受け入れ、尊敬の心でお互いを見てとって、お互いの存在を愛し、お互いから学び合おうとする心」を自分の中で育てる上で非常に大切なことではないでしょうか。

実際、この円のイメージと同じ存在につながっているという信念は私に相手を敬い、相手の歩む道から謙虚に学ぼうという姿勢、換言すれば「互敬の精神」を与えてくれました。この互敬の精神が私とテゼにいる人達の心を結びつけたもう一つの大きな心だったと思います。まず、「一人一人の中にいらっしゃる神様に対する尊敬の気持ち」が私の中に生まれるようになりました。一人一人の中にいらっしゃる神聖なものに対して尊敬の気持ちを払えるという事は相手への心からの信頼を持つうえで大切になります。また「他者が円の中心に向かって歩んでいる道への尊敬の気持ちとそこから何かを学び取るうとする謙虚な心の姿勢」が自

応なしにこの世界で其々の違いを乗り越えながら生き抜かなければなりません。そこで必要となるのはやはり「私達は同じ一つの家族の一員であるという揺ぎない信念」と「違うものとして



犬養道子先生の友人、ブラザートーマス氏と

違うものとして受け入れ、尊敬の心でお互いを見てとって、お互いの存在を愛し、お互いから学び合おうとする心の姿勢」(互敬の精神)だと思えます。こうした心事なしに世界に本当の意味での安心・平和・幸福は訪れないと思えます。今、私は廣池博士の子供にあたる生徒達を麗澤中高等学校で教えていますが、未来を創っていく子

然と自分の中に生まれるようになりました。相手が大切にしていることを大切にし、またそこから自分が謙虚に学び取るうとすることはまさに相手に歩みよることであり、人と人との距離を近づけ、お互いに円の中心に近づくことだと思えます。そして、私は「円の中心を通して人の幸せを祈ること」ができるようになりました。祈りは人類共通の心であり、他者の幸せを心から祈ることが自分と相手の心、そして神聖なるものを繋いでくれる架け橋となるのだと思えます。私はテゼでの修道生活を通して、こうした「信念」と「精神」こそが、まさにこれからの多文化多宗教社会で求められる、次世代に伝えていかなければならない心だと確信するようになったのです。

このように私は麗澤で御縁を頂いた犬養道子先生との出会いからテゼ共同体というキリスト教の修道院に導かれ、そこで自分自身が責任を持って次世代に伝えていかなければならないことは何なのかに気付く事ができました。今後も世界は小さくなり、ますます多文化多宗教社会が進んでいきます。そして、子供達は否

供達にその事をしっかりと伝えられるような教師になりたいと思っています。それが麗澤教育を受けた自分の役割であり、使命 (VOCATION) だと思っています。

麗澤大学で学んだこと

PURELAKE INTERNATIONAL 古賀雅子

(第五十八期 中国語学科卒)



現在、中国上海でアパレル関係の会社でジェネラルマネージャーとして働いております。主に、日本のブランドから出てくる生産指示書を中国の工場に指示し、品質や納期などの生産管理をする会社です。生産管理の他に、商品や素材の企画提案なども行っており、現在の目標は上海で自社のショップ（ブランド）を持つ事です。

私は上海事務所の立ち上げ時のスタッフとして入社し、当初は、貿易・財務など主に事務の仕事をしておりましたが、「人とコミュニケーションを取る仕事になりたい」と、営業職に立候補し、担当顧客を持たせて

現在の仕事で特に必要だと感じるのは「コミュニケーション能力」です。営業は特に、お客様に良い印象を与え、信用してもらい、相手の意見を尊重しつつ、こちらの意見も通すべきところは通さなくてはなりません。また、サプライヤーである中国人とのコミュニケーションがうまく取れなければ、順調にことが進まないことも多々あります。中国人の文化や思想、面子を尊重し、その中で日本人のやり方を理解してもらうことが必要です。これは、社内のスタッフに対しても同じ事が言えます。その場の空気を読み、その場その場に応じた判断と対応が求められます。

これらに必要なコミュニケーション能力を培ったのは、他でもなく大学時代だったのだと思います。正直、私はこのような場所で執筆させて頂くには恐れ多いほど、「優良な学生」とは程遠い学生でした。本業である中国語の勉強はそっこのりで、友人と遊んではかりいました。今は、縁あって上海で中国語を使って仕事をしておりますが、学生時代の先生方、友人誰もが、私が「中国語を使って仕事をしようになる」と

もらえるようになりました。そのうちに、会社の営業方針として自社の企画商品を得意先に売り込むことになり、「洋服が好きなので、自分でデザインをしたい」と名乗りを上げ、営業をしながら提案商品の企画をするようになりました。現在では、日本と上海半々で仕事をしている社長が不在時の、上海代表として仕事を任せてもらえるようになり、営業、生産管理、企画提案デザイン指示書の作成、会社の代表としての社内管理、財務状況の把握など、仕事内容は多岐にわたりとて忙しい毎日ですが、同時にとても充実した日々を過ごしています。

は思ってもいなかったのではないかと思います。大学時代は、毎日学校に行くのが楽しくて、朝から晩まで授業以外の時間は友人と遊んでいました。楽しすぎて授業に「出席できない」時もあるほどに：：：小さな大学で、周りに遊ぶようなところも無かった事が、逆に仲間との時間の密度を濃くすることに繋がっていたのだと思います。

毎日何をそんなに話す事があるのかという程、学校にいる時間、学校を帰った後も一緒にご飯を食べ、一人暮らしの友達の家泊まって夜遅くまで語り合う。そんな日々をすごしていました。初夏の九十九里浜旅行や夏の花火大会、冬のスキーツアーなど旅行にもよく行きました。毎日一緒にいれば、もちろん喧嘩をすることもあり、意見が合わず泣きながらとことん話し合った事もありました。そうやって過ごした日々の中で、人の意見に耳を傾け、どうやったら相手に嫌な思いをさせずに話ができるのか、どうやったら良い印象を与えられるのか、相手を思いやる気持ち、大人数で動くとはどういうことなのか等、人と接する時の

基本のようなものを無意識のうちに学んでいたのだと思います。

こうして、非常に多くの時間を共有し、私にコミュニケーション能力を自然と学ばせてくれた仲間たちは、皆、私以上に長けたコミュニケーション能力を発揮し、各フィールドで活躍しています。そして、今はそれぞれ別の道を歩んではいますが、何かあったときには必ず支えになってくれるという安心感、信頼感がそこに存在しているのを感じます。

また、恩師と呼べる先生との出会いも、麗澤大学での大変に貴重な出来事の一つです。多面的に物事を見て、押し付けではない人生のヒントを与えてくださり、生徒を「一人の大人」として、きちんと向き合っただ話をしてくださいました。卒業後も何年か一度、先生に会いに行くようにしていますが、学生の時とは違う私に対して、真剣に話を聞き、その時々に適したアドバイスをしてくださいます。先生から頂いたアドバイスや、薦めて頂いた本は、仕事で悩んだ時や落ち込んだ時に自分と向き合う為に非常に助けになっ

ています。

「大学で得たものはなんですか」との問いに、私はいつでも「素晴らしい仲間、素晴らしい恩師です」と答えてきましたが、もう一つ忘れてはならないのが、やはり中国語です。「優良な学生」ではありませんが、卒業する為には最低必要限の勉強はしなければなりません。厳しい事で有名な麗澤の中国語学科ですが、そのおかげで、現在中国で仕事をしている、私を含む麗澤大学中国語学科卒業生達は、話をしていると中国人に間違えられることが多いようです。それだけきれいな発音で中国語を喋っているというくらい、厳しい発音練習を乗り越えてきた、麗澤卒業生ならではの思いです。

時代は変わり、取り巻く環境も変化しているとは思いますが、小さな学校だからこそその仲間との連帯感、生徒一人一人を信用して後押しして下さる先生との出会い、厳しいからこそそのレベルの高い語学教育など、私が経験した麗澤大学の良さはいつまでも不変であって欲しい、と心の底から願っております。

〈特集〉社会で活躍する卒業生④

麗澤で得たもの

アキュフェーズ株式会社

齊藤 臣 一

(第五十六期 国際経済学科卒)



私は現在アキュフェーズ株式会社という音響機器メーカーに勤務しています。Enrich life through technology(科学技術を通じて人々の精神生活を豊かにしたい)との企業理念を旗印に、音響機器の中でもハイエンドオーディオと呼ばれるオーディオファンの方に向けて、オーディオアンプやCDプレーヤーなどを製造販売している会社です。製造している製品は音楽再生のために妥協を許さない贅沢な設計となっており、一〇〇万円以上するオーディオアンプや、CDプレーヤーも一八〇万円以上する大変高価な製品もあります。その製品は設計の先進性や製造品質の高さから、毎年オ

ーディオ誌のイヤーマデルとして表彰を受けています。また、補修用パーツは特に期限を定めずに保管しており、一九七三年の発売の製品一号モデルでも修理がいまだに可能であるなど、ユーザーを大切にするアフターサービスの面でも高い評価を頂いています。日本以外でもオーディオファンあこがれのブランドで一位となったドイツを中心に、世界的にハイエンドオーディオ業界の中で存在感のある会社として知られています。

さて、私が麗澤大学を選択した理由は、高校時代に一ヶ月ほどニュージーランドにホームステイで滞在し

た経験や、たまたま海外旅行に行く機会が続き、異文化に対して興味を持った事でした。また高校時代の恩師の影響で経済学を学びたいと志望していた私に、外国語と経済学の両方を学べる機会のある、麗澤大学の国際経済学部はぴったりの選択となりました。

私が入学した国際経済学部は、入学した年が学部が創設されて二年目。まだ国際経済学部がやっと定員の半分、大学院も無い頃で、大学全体で現在よりも学生数も大分少なく、なんとなく学校全体にのんびりした雰囲気があった気がします。しかしその一方、国際経済学部は学部が創設されたばかりで、これからこの学部を育てていくのだという情熱を持った先生方が多かった印象があります。大量のレポートや大変厳しかった英語の授業も良い思い出です。

二年次には友人が立ち上げた空手道同好会の創立に関わったのも大きな思い出です。伝統ある部活動が多くある中、ほかの団体に負けないような活発な同好会を作り上げていくために、対外試合やイベントでの演武に積極的に参加し、その存在をアピールしたもので

わずに一品一品手作りで製造しており、一日の生産台数は二十五から三十台ほどの台数となっています。製品の製造数に限りがあるため、取り扱い頂いている販売店は主にオーディオ製品の専門店を中心に全国でも約一二〇店ほどとなっています。営業の仕事は、例えば新製品が発売されるに当たって、可能な限り全販売店に新製品を持ち込み、従業員の方にその音を聴いて頂くような活動をしています。また同様にオーディオ専門店はその地域のオーディオを趣味とする同好者の拠点となっている事が多いので、スペースに余裕のあるお店ならエンドユーザーを集めての製品試聴会を開催するなどしています。あくまでも商品の良さを理解してもらおうことを第一に考えた営業活動を行っています。少人数の会社ですので、試聴会等のイベントの場合は自ら企画立案し、その機材手配の段取りから会場の設営まで、ほぼすべてを自分で行わなければなりません。そのため、積極的に会社の内外に働きかけを行い、自らも一番働かないと全く仕事が前に進みません。麗澤時代の空手道同好会で培われた積極的に行動

した。四年次の最後には黒帯を取得でき、この事が社会人になった際に努力を続ければ結果が出るという自信となりました。現在、このような良い経験を積める大学内の部活動やサークル活動が以前と比べるとかなり低調となっていると聞いており、大変残念に思います。そんな中、空手道同好会は後輩たちのがんばりの結果、今年創立十五周年を迎える事ができ嬉しく思います。

卒業後は海外とつながりのある仕事に興味を持っていましたので、自動車関係の商社に就職しました。しかし、次第に学生時代に学んだ日本経済の根幹を支えているものづくりに携わる仕事に興味が移り、電機メーカーへ転職、さらに縁有って現在の会社へ勤務することとなりました。現在、国内営業部に所属している私の業務は、国内の担当地区（一都九県）にある契約販売店への営業活動が主になります。

私の勤務している会社では製品の製造品質を守るため、made in Japan にこだわっています。本社内にある工場では、熟練した技術者がベルトコンベヤーを使

するという精神が、現在の営業の仕事の中で一番生きています。

お客様であるオーディオ専門店は社員三〜四人ほどの小規模な経営のところが多く、そういった販売店では経営者である社長自ら販売現場に立って営業を行っています。自然と営業活動に当たって社長とお話する機会も多くなります。お話をするにあたり会社を経営されている方々ですから、商品知識のみならず経営的な事、現在の経済情勢を始め、音楽やスポーツなど幅広い知識が無いとなかなか会話に花が咲きません。日々書籍などを読んで勉強しなければいけません。麗澤大学での厳しかった授業ほど記憶に残っており、経営的なことや経済情勢などは学生時代に習った知識が基礎として役に立っています。

社内にいるときは、電話の応対も営業の仕事で、時折、海外からの英語での電話を受けることもあります。海外担当の社員が在社していれば、その社員に取り次ぐだけで済みますが、不在時に英語での電話を取ってしまったときは、麗澤時代の英語の授業で先生に

指名されたときのような緊張感が走ります。大概は担当者には不在である旨伝えればそれで済みますが、それではと技術的な質問をされるとお手上げで、改めて電話してもらおうようにするのが精一杯です。せっかく外国語を学ぶのいい環境の大学にいたのだから、もう少し真面目に勉強をしていれば……と後悔することもあります。

さて、オーディオは一八七七年にエジソンが蓄音機を実用化して以来、テレビにその主役の座を奪われるまで、レコードを中心としたオーディオはホームエンターテインメントの主役でした。最近ではアップルのiPodを代表とするメモリーオーディオの爆発的なヒットのおかげで、電車に乗れば必ず音楽を聞いている人を見かけます。音楽を聴くという行為が特別な行為ではなくなった反面、何かをしながらか、ながら鑑賞やただ聴いているだけになっていく方が多いのではないのでしょうか。そのため現在のオーディオ機器はデザインや操作の簡便性が優先され、ともすれば音質がながいがるにされた製品も混じっています。対して、現

在の技術で音質を第一に作られたハイエンドオーディオ製品は、生の演奏と比べても劣らない、場合によっては演奏で聞くよりもいい状態で音楽を再現してくれます。能動的により深くじっくりと音楽を鑑賞したい方には、演奏を忠実に再現してくれるハイエンドオーディオが必要とされています。

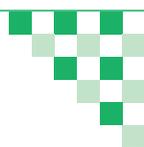
現代はITの進化により情報が氾濫し、インターネットで検索すれば、大概のことが簡単かつ瞬時に調べることができるようになりました。このことにより現代人は以前よりも考え抜く力や想像力が落ちてきているといわれています。また、最近では秋葉原での通り魔事件をはじめ、痛ましい事件が起こる度に犯人の事件が引き起こす結果に関する想像力の欠如が嘆かれています。

音楽鑑賞は音楽を能動的に聴くことによって、音楽にこめられた作曲者や演奏者の思いを想像し、その世界を堪能する趣味です。音楽にこめられた作曲者や演奏者の思いが理解、共有できたとき、その音楽から深い感動を受けることができるのではないのでしょうか。

か。よって音楽を能動的に聴こうとするオーディオ趣味は、想像力を涵養するホームエンターテインメントの域を超えた、非常に高度な趣味だと言えるでしょう。

今後このオーディオ趣味文化を一人でも多くの方に知っていただけるよう、現在の職場で努力を続けていきたいと思えます。





麗陵祭メインステージ (2008・11・1)



留学生と高校生交流 (2008・11・14)



ホームカミングデイ (2008・11・15)



光ヶ丘国際音楽祭 (2008・11・30)



国際交流もちつき大会 (2008・12・12)



箱根駅伝10区で快走 (2009・1・3)

座談会 学生生活を語る

司会 井出 元 教授(学長補佐・外国語学部)

出席者 齊藤 由佳さん(英語学科四年)

梶山みゆきさん(英語学科四年)

矢部 保旭さん(中国語学科四年)

今井 覚さん(日本語学科四年)

司会 本日、皆さんに集まって頂いたのは「在学生が大学を語る」ということを通して、この大学生活四年間で「今の自分をつくり上げたきっかけになったのは何か」「自分を高めるきっかけになったのは何か。それによってどう変わったか」ということを話してもらいたいと思っただけです。そこで最初に簡単に自己紹介をしてください。

今井 日本語学科四年で、群馬県出身です。一年から四年の前期までは柏のAパートで一人暮らし、四年後期から寮に入って留学生たちと一緒に

生活をしています。学生生活で一番大きいのはRIFA(麗澤国際交流親睦会)で活動していたことで、今は馬術部、自校学習グループにも入っています。

矢部 国際経済学科に二〇〇三年四月に入学して中国語学科に二〇〇四年四月に編入しました。部活は二年目半ばまでの二年半、剣道をやっていました。一人暮らしをしているので南柏のローカルトークもできるとしています。

梶山 英語学科四年です。静岡県の出身です。一年からずーっと寮生活です。一〜三年までは学祭

(学友会麗陵祭実行委員会)の総務局で活動していたのでそこでの経験や、三年次に寮長をやらせていただいたので寮生活をする中で留学生との交流などを通して考えさせられたことを話したいと思います。

斉藤 英語学科四年です。学生活動では課外活動に積極的に取り組み、中でも大学祭の装飾局局長をやらせてもらいました。私は代表のキャラクターではなかったのですが、自分を成長させてくれた経験でした。また英語学科主催の新生入谷川オリエンテーションキャンプで研修スタッフをしたり、一年の時からバスケットサークルで楽しくやってきました。

司会 皆さんそれぞれが、RIFAとの出会い、学科の変更、寮長や局長など様々な課外での経験をしています。こうした経験が自分自身を成長させる大きなきっかけになったと思います。どうでしょうか。まず梶山さんは、最初に寮生として生活した体験、さらに寮長を務めた体験は自分を大き

く成長させた要因であると思います。が……。

梶山 寮長になると寮生の時のように自分の好きなことだけやっていけない。寮全体のことを考えなければいけない。留学生が半分以上いて、生活の仕方、要望もそれぞれです。その人のやりたいようにやらせることはできないけれども、一人一人に快適な寮生活を送ってもらいたい、そのバランスのとり方が難しかったですね。



司会 寮長という役目は二十四時間寮生と向かい合

うのですから、その心労は大変なものだと思います。たとえばいろんな意見が出た時に、どんなことを心がけましたか。

梶山 寮生が、一人でも暮らしにくいとか、楽しくないと思われるのがいやだったので、ちゃんと一対一で話すようにしました。特に留学生は、最初は私に言ってもわかってくれないという気持ちもあったのか、向こうからはなかなか気持ちを打ち明けてくれませんでした。自分から聞きに行くとう理解し合うことができました。きちんと向き合って話すこと、それに自分からアクションをかけることが大事だと思いました。

司会 寮長を通して得た貴重な体験を踏まえて、後輩の寮生に寮長を勧めたことはありますか。

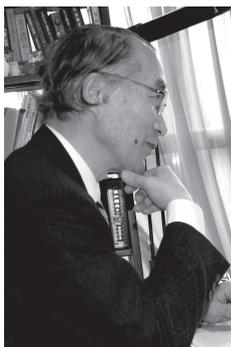
梶山 自身は勧めることはなかったのですが、次期寮長を決める際、二人立候補してくれる人がいたので、寮長になることの魅力は伝わっていたのかなと思います。寮長になるといいことが沢山あります。特に私と寮にいる同級生四人と比べた

時、下級生や学寮課の方々との関わりが全然違うと思いました。寮長になることは学生生活を充実させる上においてすごくお勧めかなって思いました。

司会 そうした寮長としての経験が今の梶山さんをつくり上げたということですが、次に矢部さんはどうですか。

矢部 私は学部を代わったのが一番大きいです。私が経済学科にいた時は他の人とあまり接する機会がなくて、いつも同じ三〜四人で一緒にいるだけ。昼も教室で食べて学生食堂「ひいらぎ」に行きません。授業のある一号棟にいて授業が終わるとあとは帰るだけ。毎日何か物足りないと思っていました。もと

もと外国語を勉強したいこともあって転部を決意し中国語学科へ来たたら、先輩



井出 元教授

後輩のつながりが深いし、その中で自分の居場所を感じました。毎日いろんな仲間や先輩ともちゃんと向き合って話が出来て、それが刺激になりました。

司会 転部を決意するまで大変だったと思います。が、そのことよって多くの友人と出会ったことが、自分をつくっていったのですね。

矢部 そうですね。たくさんの人に会い、いろんな話をしました。毎週水曜日の夜、近くの四年生の家を集まって中国語の勉強会をしていました。夜八時ごろから始まってご飯を食べて、二時間ぐらい真面目に中国語を勉強して、その後十二時ぐらいからひたすらお酒を飲みながら語り合う。今の自分の考え方、様々な人の考え方などとても多くのことを学ぶことが出来ました。

司会 学生時代、先輩と語ることは大変大事なことです。先輩の一言は先生の言葉よりも説得力のある場合があります。斉藤さんの場合は、いかがですか。

斉藤 一番自分が変わったと思うのは、裝飾局長の時でした。負けず嫌いな性格がきっかけで局長になった気がします。谷川（オリエンテーション）

スタッフでの先輩がキラキラ輝いていて、その先輩に可愛がってもらい大学祭のメンバーに入りました。一年生の時にいろいろと悔しい思いをしましたが。しかし、一年生だった私の思いは上には届きませんでした。そこで自分が上に立って小さな意見も取り入れていきたいと思いました。負けず嫌いなところが買われたのかなって。

司会 負けず嫌いだけでは上には立てないと思います。恐らく斉藤さんは自身の中に人間としての成長があったと思うのですが。リーダーとなって何かをけるようになったことがありますか。

斉藤 そうですね。私がモットーにしていたこ



斉藤由佳さん

とは何事も楽しむこと。代表になると楽しむことよりも優先しなければいけない義務や責任が増えるので辞めようとも思いました。しかし仲間からお前がいるなら続ける、一緒に変えようと思いを掛けられ、何か人のために動きたいと思いました。つまり以前は自分が楽しむことにより、周りも楽しくなるという考えでしたけど、今は人を楽しませることが自分の楽しみに変わりました。

司会 本当の楽しみというのは、そういうところにあると思います。「人の喜んでる顔を見て自分の喜びとする」。それは人間的に見てすごい成長だと思う。局長という立場でなかったらそういう風にはならなかったかもしれませんね。では次に今井さん、お願いします。

今井 一、二年生のころはただ真面目に授業を受け、真面目に生活していました。RIFAに入っただのは、毎週火曜日に会話練習というイベントがあつて、第二外国語で中国語を取っていたので勉強しよう。RIFAに入らなくても誰でも参加

できたのですが……。その会話練習に参加したときに、話しかけてくれた先輩と意気が合いました。お互いに米国へいった経験があり、話が盛り上がりつつ居場所が出来たと思えました。RIFAの中では留学生と交流するというのがメインですが、一、二年生のときは上級生と、三、四年になつてから留学生と交流するのが楽しくなりました。代表になつたのは、二年生の後半からですけれど、その時のRIFAは元気がありませんでした。今一年生は四十人もいて、全部で五十〜六十人になります。僕の代は僕とか二人くらいで下は三、四人もいなくなつた。四年生は「イベントは大変だから必要最低限にしよう」とか、一年生の名前を覚えるのも夏休みに入ってから。先輩と口論もしました。もちろん先輩方とは今でも交流があり、口論できる仲ということでしたし、先輩方がいなければ今の僕はありません。ただもつとこうしたらよくなるんじゃないかという思いがありました。新しいイベントを増やし、一年生の勧誘

もしました。RIFAは国際交流センターのお世話になっていますが、サークルとして楽しむ面と仕事を任せられるといった面があります。成田空港に留学生を迎えにいったり、留学生歓迎懇親会でお手伝いさせて頂いたり、そういう部分が大きいです。

授業を取っていた川久保剛先生（外国語学科助教）にも教えて頂きました。授業で質問したり、研究室で話させて頂いたり、僕の入り口でした。自主企画ゼミも先生にお願いしました。先生との出会いがなかったら、こうした活動ができなかったと思います。特に今の私を作ってくれたのは、先生の紹介でいろんな講演会に行かせて頂いたり、知識のない自分に勉強させて頂きました。自分がどのように考え、どのようにしたらよいか、そうした相談ができたのもよかったと思います。先生はどうこうしてとは言いませんでしたが、よく話を聞いてくれました。

司会 それぞれが充実した学生生活を送り、自分を

成長させてきたきっかけは、人との出会いがあるように思います。授業で専門的知識を与えてくれる先生、人生を語ってくれるような先生も必要です。あるいは本格的に遊んでくれるような先生も。大学とは人と出会うことによって自分を成長させていく場であるといえそうですね。

次に麗澤大学に在学したからこそ味わえたような体験はありましたか。例えば矢部さんは、「成田歩き」を実施するメンバーですね。

矢部 毎年夏にB棟の下から出発して成田山の新勝寺まで歩く企画です。ここから五十キロ弱の距離があつて夜の八時か九時に出発して、着くのがお昼……。

斉藤 何で夜から？

矢部 夏の昼だと暑い。夜の涼しいうちにスタートして、距離を稼ごうと……。



梶山みゆきさん

梶山 秋にやったら？

矢部 汗をかいた後、寒くなっちゃう。

今井 何人ぐらい参加するの。

矢部 その年によって二十人だったり、三十〜四十人だったり。

今井 ゼミ生だけ？

矢部 ゼミの人が企画するんだけど、参加する人は他学科の人だったり……。

今井 誰が参加してもかまわない？

矢部 全然、大丈夫。

司会 炎天下を歩くわけだからリーダーのプレッシャーも大変。けが人を出しちゃいけないし、熱中症の不安もあります。矢部さんは四回も参加していますね。

今井 四回やって毎回変わっていく？ 自分の成長が……。

矢部 年を重ねるごとに歩く目的が変わってきました。一年目は先輩について行くのが精一杯で、ただ楽しみながら歩きました。二年目になると歩き

ながら、こんなことを考えてみようと思ったり……。疲れて何も考えられない状態に陥ったこともありました。最後の今年も、僕を含め三人で準備・企画しました。初めて主催する形になり責任を持って歩かなきゃいけないという、また違った大変さがありました。毎年違った「成田歩き」で面白かったです。

今井 毎回知らない人たちですか。

矢部 そうです。

今井 その人たちとその後どうなるんですか。

矢部 キャンパスであつて挨拶するようになったり、研究室で夜遅くまで語ったり。他学科とか、知らないサークルの人たちで、つながりが出来て、そういう意味でも面白い、麗澤大学ならではの活動であると思います。



矢部保旭さん

今井 来年はR I

F Aとか自校学
習メンバーを参
加させてもいい
ですか。

矢部 もちろん。

今年は寮長会がそろいのTシャツを作って参加しました。



今井 寛さん

今井 楽しそうだなあ。

矢部 楽しそうですが、ホントに体力が限界になります。休憩になると皆横になってしまふ。歩いて
いる時の皆の会話がまた面白い。やることがない
から延々としゃべる。電車だと一時間のところだ
けれど、時間をかけて歩くということが大事です
ね。皆、人の優しさに気付く。疲れた人に手を差
し伸べたり、荷物を持ってあげたり、男性が女性
をカバーしたり、女性に励まされたり……。おし
なべて女性が元氣。五十キロだと女性が強い、十
キロだと男性だけ。改めて女性の偉大さがわか

りました。

司会 他に麗澤大学だからこそという何かあります
か。寮だってそうだね。面白い行事はありませ
んか。

梶山 全体では夏の球技大会とか、クリスマスや年
末のイベントがあり、主催した楽しさがありました
た。寮の四階(三十人ぐらい)に住んでいました
が、その階の人たちだけでやったお食事会も楽し
かったですね。私が一年生の時の寮長さんがパー
ティーを開いてくれたのですが、自分も寮長にな
ってやってみて、先輩はすごかったなあと思っ
て感じました。

また、寮長としての心構えを身に付けようとい
うことで、初めに寮長セミナーというのがありま
す。寮長は男女合わせて十五人いますが、皆で二
泊三日で谷川へ行き、寮の運営について話し合
いなどします。ほとんどが初対面の人たちで、学年・
学科もバラバラ。行く前は不安でいっぱいでした。
でも、いい寮にしたいという共通の気持ちがあ

そうした不安を取り払ってくれたのだと振り返っ
てみて思います。抱負とかを発表するのです
が、皆立派なことを考えているなと感動しまし
た(笑い)。皆との繋がりも寮長をやったからこ
そできたものだと思うと、本当にやってよかった
と思います。

司会 齊藤さんは?

齊藤 谷川オリエンテーションキャンプのスタッフ
ですね。新入生のオリエンテーションキャンプは
一年生の時は正直に言うとお面白くありませんで
した。知らない人同士が十人ぐらいずつ集められて
「三日後に劇をやってください」。人見知りしな
い人はパーッと仲間になっていいんですけど、私
は社交的な人見知りだったのでツンツンして(笑
い)。一年間で先輩と仲良くなつて、谷川スタッ
フに応募しました。スタッフは一年生の前で「疲
れた時に眠いと言っちゃいけない」「疲れた顔を
見せてはいけない」「一年生の前では常に笑顔」
って先輩から教えられていました。だから自分た

ちだけが集まったときに「ああ疲れた、疲れた」
と言っていたんですけど、楽しかったなあ。皆で
団結して何かを成し遂げることは。結果はもちろ
んだけど過程が大事。谷川を成功させるための過
程は大変だったけど最高でした。あとはリーダー
セミナー※に行く機会があつて、そこで井出先生を
知ったんですけど(笑い)。

司会 何か記憶に残っていることがありますか。

齊藤 その頃局長になったばかりで、会議をやる
と、いろいろ意見が出て上手くまとめることがで
きませんでした。私にとって局長が見えまし
た(笑い)。セミナーで井出先生はAランクから
Dランクのリーダーがいると話されました。私
は、性格上Dランクだなあと思いました。Dラン
クのリーダーって、上に立つとメンバーから馬鹿
にされるリーダーらしいんですよ。人に馬鹿にさ
れるのがいやだからいろいろ知識を学ぶ。そうし
てCランクに上がる。Cランクは人から怖がられ
るリーダー。人に怖がられるのが嫌で人に優しく

する。そうするとBランクになって、人から愛されるリーダーになる。人から愛されるBランクのリーダーで満足する。しかし真のAランクのリーダーは陰の支配者みたいでメンバー一人一人を主役にさせてしまう存在だということです。じっくりと時間をかけて真のリーダーになれるのだと教えられ、私はまだ未熟者でいいんだ、一年かけてしっかりしたリーダーになろうと決意しました。このような学ぶ機会を与えてくれるのは、やっぱり大学なんだと思いました。

司会 リーダーセミナーに力を入れているのは、そのリーダーというポジションを与えられたからこそ通じる言葉があるからです。リーダーはこうあるべきだと全学的にやっている大学はあるが、本学のようにリーダーだけ集めてやっている大学はめずらしいと思います。寮長やリーダーを体験しなければわからないことがあるのです。だからリーダー教育は大事なのです。ところで谷川オリエンテーションキャンプってどんなことをするので

すか。

斉藤 大まかに四つの構成になっています。第一部は初日の午前中にやるのが一年生と交流を深めるためのゲーム遊び。スタッフが考えてとにかく話すきっかけをつくる。第二部がティーチャーズトーク。英語学科の先生が新入生と生で話せる場を作る。第三部はスタッフが大学生活について話します。課外活動授業、留学など。最後がファンナイトといって皆で劇をする。その間に廣池千九郎記念館の見学等もあります。スタッフの立場も二、三年生では違っていました。一年目は楽しかったのに二年目は一年目とは同じ心境になりませんでした。どうしてかなあと考えてみたら一年目は司会というような前に出る仕事をして先輩が私たちを立ててくれました。二年目は私たちが後輩のスタッフを持ち上げ、陰の立場だったからと思いました。いい勉強になりました。

今井 二年目でどうして辞めようと思わなかったのですか。

斉藤 一年目が何より楽しかったから。オリエンテーションが終わったときに泣いてしまいました。それぐらい達成感を味わえたり、自分に自信を持つことができました。睡眠時間も少ないし、春休みの時間も減るけれど、それ以上の物が得られる場所だったんです。

司会 それは貴重な経験です。自分をつくっていることは確かですね。

今井 今井さんは、今年初めて開催された「光ヶ丘国際音楽祭^{***}」の責任者でしたね。

今井 大学が地域に貢献する大きなイベントです。留学生、RIFAのメンバー、大学祭で会った横井秀平君（英語学科四年）とか、いろんな学生に手伝ってもらいました。商店会の人たちと準備し、当日は晴れて大勢の人たちに来ていただきました。留学生は料理をつくったり、発表もしました。参加した学生は、元気がいい一年生が半分以上占めていて、先々商店会の人たちとのつながりが出来たのではないかと思います。

司会 今後どのようなことを考えていますか。

今井 イベントだけで終わらせたくありません。学生が商店会を活用できるようなシステムづくりをしていきたいですね。

司会 音楽祭にもっと協力ができるように思いますね。学生の中にミュージシャンが多いので。

今井 今回食器とか鍋など大学祭のものを借りただけで、大学祭のメンバーがもっと入ってくれたら準備ももっとスムーズに行きますね。いろいろなノウハウを持っているわけだし……。

司会 大学生活をそれなりに充実させている様子がよくわかりました。ところであえて麗澤大学の良いところは何かと聞かれたら何と答えますか。

今井 「生き方」を勉強できたこと。RIFAを、馬術部を元気にしたと思っていますが、今度は地元を元気にしたい。実家は大工。おじいちゃん、おばあちゃんが農業をやっています。麗澤へ入らなければこうは思わなかったと思います。麗

澤はこれからの時代に活躍する人が成長する場所。他の人たちに伝えるのは難しいけれど根本的な売りだと思っています。

梶山 人がいいし、出会いの場が沢山あるところ。寮生活していた分、留学生との交流も多かった。卒業してしまっただけで今も台湾の人と仲良くさせていただいています。

矢部 いい意味で人が少ないところ。一人ひとりがやりたいことを明確にして動いたらそれが出来る環境がある。

斉藤 矢部さんと同じで環境だと思う。自分から動けば居場所が見つかるし、自分が何かしたい時に環境がそろっています。

司会 大学生として常に心がけていることはありますか。

梶山 四年生になると授業が少ないので大学へ行かなくなります。人とも会わなくなるので、寮では自分から話しかけるようにしています。

矢部 実践できているかどうかわかりませんが、自

分が興味あることに対して素直で敏感でいたいなあと思っています。

斉藤 当たり前のことを当たり前でできる人間になること。楽しむことも、笑っていることも、それらを意識し続けられれば無意識にできるようになると思っています。そうなれるよう心がけています。

司会 最後に「大学とは何か」一言でまとめるとどうなりますか。

今井 自分の生き方を学ぶところ。

矢部 自己表現の試行錯誤をするところ。

斉藤 変化の場ですかね。社会人になっても、辛いこととか悔しい思いをすることがあると思います。自分がそれを変えられるとか、変えられる人が現れるのを期待しながら変化していきたいと思っています。

梶山 視野を広げる場所。世間知らずで視野も狭く、人の考え方を自分から取り入れていく姿勢もなかった。麗澤でいろんな人と出会い、視野が広がったと思います。

司会 今回の座談会は、初めての試みでもあり、大変漠然としたテーマでしたが、皆さんの発言を聞いていて、大学とは何か、大学で何を学ぶかということがはっきりしたように思います。長時間、ありがとうございました。

力。平成二十年十一月三十日（日）に実施された。

* 母体は天文同好会。麗澤高等学校に始まり、学園の年中行事の一つになっている。行事がしばらく途絶えていたのを麗澤高等学校から本学に入学したある学生が、学園の歴史を調べていて気がつき、「自分たちもやろう」と復活した。始めは七、八人で歩いた。

** 参加するリーダーとは、学友会会長、麗陵祭実行委員長、そして各部活動、サークル活動のリーダー、さらに寮長です。年二回（二月と十月）開催されている。

*** 光ヶ丘商店会と麗澤大学の商店街活性化のためのコラボレーションイベント。千葉県が推進している「みんなで作る商店街」の平成二十年度モデル事業に採択され、本学は、①音楽を通じて留学生ら麗大生と市民が、地域への理解と交流をより深めてもらう、②留学生が母国料理のレシピを提供し、十カ国十二種類の料理を屋台で販売する——の二点で協



仲間の大切さ

バスケットボール部女子部長

萬羽香織

(国際経営学科三年)



みなさんには、大切な仲間がいますか？

一つの目標を掲げ、お互いを励ましあいながら、努力し、目標に向かって練習する。一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に喜ぶ。私にはそんな仲間がいます。大学生になると、クラスはありません。個人個人でとる講義も違い、自分の将来のために自分で目標を掲げていかなければなりません。もちろん学生生活でできた友達も大切な友達です。しかし、同じ目標を持った仲間というのは、また違う存在なのです。麗澤大学にはさまざまな部活動や、サークル、委員会などがあります。私は麗澤の

学生の皆さんにぜひ、どこかの団体に参加し、仲間の大切さを体感していただきたいです。大学時代にしかできないことは、たくさんあります。それをぜひ見つけてもらいたいです。私にとっては、それがバスケットボール部でした。まずは、私たちバスケットボール部の現状を紹介します。

私たちは、週三回、夕方六時半から九時まで、第一体育館で練習しています。練習は限られた時間で集中して行っています。フットワークから、シュート練習、パス練習、一対一、ゲームなど、様々な練習を時期に合わせてメニューを組んでいます。部員

は四年生二人、三年生七人、二年生三人、一年生十九人です。昨年の春、一年生が多数入部し、雰囲気さがらりと変わったように感じます。

そして、私たちバスケットボール部の特徴としてあげられるのが、男子と女子と一緒に練習をしている、ということ。男女でお互い指摘しあうことで、さらに技術を向上させることが出来ると思います。大会にももちろん参加しています。春のトーナメント、秋のリーグ戦、千葉大会、新人戦などの大会にも毎年参加しています。夏には合宿も行い、普段出来ない練習をし、大会に向けて追い込みを行っています。練習はつらくないと言ったらもちろん嘘になります。特に合宿中では、体が筋肉痛になっ てしまい、走るのがやっと、ということもありました。しかし、それも今では笑い話として話題に上ります。

毎年十二月にはOB・OG会が行われ、たくさんの先輩方が集まってくださいます。その中には、バスケットボール部を作ってくださいった先輩もいらっ

しゃいます。このように内容の濃い一年を私たちは過ごしています。

私は二年間、このバスケットボール部の女子部長を務めさせていただきました。部長として、感じてきたことはたくさんありました。しかしどんな内容を説明するとしても「仲間の大切さ」という言葉が大きな鍵となるように思います。わたしがこの二年間で印象に残ったことを二つあげてみようと思います。

一つ目は、私自身の気持ちの変化です。私は技術面では、決してうまいとはいえません。そのため、部長、といわれた時も、不安で仕方ありませんでした。私が練習を考えてもいいのだろうか、私よりもっと適役がいるのでは、などと考えてしまいました。私は自分に出来ないことばかりを考え、それに悩んでいました。しかし、そんなときに先輩に言われた言葉が、私にしか出来ないことを考えてみなさい、ということでした。私はその言葉に気づかされました。変えることが出来ないことを、変えよう

とすることはとても難しいことであり、時間がかか
ること。それより、今の自分に出来ることを探
し、行動することで、それが仲間のためになる。私
はこのことに気づくことができました。人にはそれ
ぞれ、出来ること、出来ないことがあり、それを補
い合って生活している。よく言われることです
が、私はバスケットボール部に入ってそれを実感し
ました。

二つ目は、昨年の秋の引退試合です。バスケット
ボール部では三年の秋で引退を迎えます。私は三年
生女子三人と共に昨春秋、引退を迎えました。私た
ちは九月から最後の大会のシーズンに入りました。
大会は一ヶ月ちよつとの間、毎週土・日のどち
らかに一試合行われ、合計平均六試合行います。私
たちは大会が始まる前と最終試合の前にみんなでメ
ールを送りあいます。普段は恥ずかしくて口に出す
ことができないことや、感謝の気持ちをメールにし
ます。私はそのメールをいまだに携帯に保護してい
ます。麗澤大学のバスケスタイルは他大学の中でも

有名なほど、盛り上がります。ベンチからはシュー
トを決めるたびに歓声が上がリ、コートの中
でも、大きな喜び方、ハイタッチは当たり前で
す。今回の大会でも、見ている大学だけではな
く、対戦した大学にも、麗澤との試合は楽しい、と
いつていただけました。私たち三年生にとつての最
後の大会の最終試合。その試合は、とても楽しく
て、時間の経過が早く感じ、あつという間のように
感じたのを今でも覚えています。私たちは最後に勝
利を飾ることができました。勝利を喜ぶことができ
たのも、続けてきてよかったと思うのも、大切な仲
間がいたからです。それを最後の試合ではとても感
じることができました。

試合終了後。私たちは円になり、お互いに感想を
言い合いました。今までの思い出話や、今まで思
ってきたこと。私たちは個性の強いメンバーが多
く、衝突することもありました。そんな話でも会話
にのほり、笑いながら、そのとき感じていたことな
どを語り合いました。その時私が特に伝えたこと

は、一緒にバスケットができるのがみんなでも良かつ
た、ということ。私たちバスケット部には一人ひと
りに存在意義があり、一人いなくても大きな違
いがあるように思います。技術面で大きく支えてく
れる人。冷静な判断と、人一倍練習をし、みんなの
意識を高めてくれる人。いつでもみんなの話しを聞
いて、みんなのためになることを考えてくれる
人。自分の意見をしっかり持って、何にでも一
生懸命に取り組む人。いつでも笑っていて、みんな
に元気をくれる人。

バスケットボール部に興味をもたれた方は、気軽
に第一体育館に来てみてください。おそらく、後輩
は大はしゃぎです。

私はバスケットボール部に所属し、さまざまな
人々に出会いました。今、そのすべての人々に感謝
の気持ちでいっぱい。本当にありがとうございます。

最後にもう一度。みなさんには大切な仲間がいま
すか？



サークルからダンス部へ

前ダンス部部长

飯野翔太

(英語学科三年)



麗澤大学のサークルで一際人数が多く、賑やかなサークルといえばダンスサークル【DiR@T】でしょう。今年はテレビ番組やCMなどの影響でダンスがとても流行しているということもあり、一年生も大勢入り、総勢約一二〇名の大所帯となりました。練習風景も前にもまして活気づき、部全体の雰囲気もかなり良くなっています。ダンスサークルの主な活動は、新入生歓迎会、一年生発表会、麗陵祭(学園祭)、クリスマスパーティーの四つのイベントに向けての練習です。

まず四月の新入生歓迎会。このイベントは新入生

にダンスを披露し、キャンパスライフの幕開けとして新入生に楽しんでもらうことを大きな目的としています。このイベントを成功できるかによって新入部員の人数が決まってくるといっても過言ではないくらい大切なイベントです。そのため、在校生にとっては新年度一発目の大きな壁ともいえます。ちなみにダンスサークルは今年度約四〇名の部員が入りました。人数から見ると、イベントは成功したといえるでしょう。

次に七月の一年生発表会。このイベントは五月に入部した新入部員達がメインとなるイベントで

す。ジャンルごとに先輩が二ヶ月間ダンスを教え、一年生をこのイベントでデビューさせるというのが目的です。もちろん新入生は人前で踊ることなどこれまで減多になかった、または初めてという学生達が大半なのでとても緊張します。私たちが一年生のときもこんな風に緊張していたなあ、と感じながら、一年生と一緒に私たち上級生も踊ります。

そしてダンスサークル一番のビッグイベントは麗陵祭です。ダンスサークルは一日目と三日目の計二回公演を行います。一日目は多目的ホールで他のイベントと同様に発表を行うのですが、通常の三倍以上の時間をかけてイベントを行うので、それにとまってチーム数もとても多くなります。なので、学園祭の一月前あたりから多目的ホールは非常に活気があふれます。みんなのイベントを成功させたいという気持ちが強く伝わってくるのがこの一ヶ月間です。三日目はメインステージでいつもより大勢の前で踊ります。毎年、発表の時間が麗陵祭のフィナーレに近い時間帯のため、在学生や来場者の気分も

高まっています、踊る側としても本当に気持ち良く踊ることができそうです。発表を終えた時の爽快感は言葉で言い表せません。

そして学園祭終了後に次の代への引き継ぎを行い、十二月のクリスマスパーティーが新生ダンスサークルの初のイベントとなります。このイベントでは今まで先輩が中心となり作り上げてきたものを、自分たちの代が中心となり作らなければいけないという大きなプレッシャーからとても緊張します。去年のクリスマスパーティーを振り返ってみると部長である私自身が緊張しすぎてしまい、司会進行での言葉は支離滅裂で何を言ってるのか分からず、おまけに全チー



ムの大事なエントリシートを忘れてしまい、皆のコメントを紹介できないという大失敗をしました。しかしこのイベントでの失敗から自分たちの反省点、課題点を見つけることができ、次のイベントからは大きな失敗はしなくなりました。ですからこのイベントは、「新生ダンスサークルが一年間のイベントを成功させるためのリハーサル」だと思って観客の皆様にも温かく見守っていただきたいと思いません。

初めにも記したとおり、ダンスサークルには【Dir@T】という名前がついています。これは Dance circle in REITAKU at Tamokuteki Hallの頭文字をとってできたもので、ここからもわかるように私たちの練習場所は廣池学園の中の多目的ホールです。ですが、新校舎建設に伴い、練習場所である多目的ホールの取り壊しが決定してしまっただけです。前々から噂にはなっていたものの、まさか私の代でそれが決定するとは思っていませんでした。私たちダンスサークルにとって多目的ホールと

はただの練習場所ではなく、みんながダンスを通じて喜び、楽しみ、怒り、悲しみといった感情を共有して、絆を深めていった大切な場所であったので取り壊しが決まった時は本当に悲しかったです。次の練習場所はどうするのかなど、いろいろ考えなければならぬことも出てきました。学生課のみなさんのバックアップや、部員たちが意見を出し合い協力してくれたおかげでなんとか次の活動場所も決まり、いい方向に進みました。

そう思ったのも束の間。ダンスサークルにまた大きな転機が訪れました。それは部への昇格です。大きな引き金となったのはやはり先程も述べた多目的ホールの取り壊しです。部への昇格の話はこれまで幾度か出てきたのですが、やはりサークルのほうが気楽だからという意見が大半を占めていたので結局実現されませんでした。しかし実際ダンスサークルは部活動と変わらないくらいの活動はしているし、練習場所が取り壊しになるのなら、これからより一層の団結力が必要であると感じたので、部への

昇格を申請することに決めました。学友会総会での審議はすんなり進み、ダンスサークルは晴れて学友会ダンス部となりました。昇格後は各部員が前にもまして活動に積極的に取り組んだり、イベント企画の時も協力度が増し、一人ひとりが自覚を持って活動していると感じたので、部への昇格は正解だったと感じました。

また、今年度はダンス部は学外での様々な場所で開催しました。中でも一番大きなものは、去年から始まった大学対抗の大会です。関東から約八十チーム出場し、そのなかの上位八チームが決勝大会に進めるという方式で、予選大会は計三回行われました。わがダンス部は第一回目の予選で四位、第二回目の予選では優勝をおさめ、決勝大会に進めることができました。決勝大会では準決勝で東海大学に敗れてしまいましたが、Best4という結果を残すことができました。両国国技館という大きな舞台で踊ることができて感無量でした。今年度の大学対抗は関西も加わり、大学日本一を争います。すでに今

年度の関東予選で私たちは優勝しているので、決勝大会進出はほぼ決定しています。これまで麗澤大学という名前を背負って大会に臨むということはあまりなかったもので、それに恥じない結果を残すために日々の練習に精一杯励んでいこうと思います。

先日、ダンス部の同窓会がありました。そこにはダンス部の創設者やこれまでの先輩方が集まり、ダンス部の歴史や今の現状について話すことができ、より一層先輩方の築き上げてきた伝統を守っていこうと強く感じました。そして、今まで以上に伝統を守り、また新たなものを築いていけるよう部員一丸となり尽力していこうと思います。ダンス部は先輩後輩関係なく本当に皆仲が良いです。活動を通して皆さんの時間を共有することで、部員同士の距離がとても密接になっています。今年のようにいろいろな問題が出てきてしまうこともあるとは思いますが、皆と一緒に乗り越えられると信じてこれからはがんばっていききたいと思います。

フィルハーモニー管弦楽団の今

フィルハーモニー管弦楽団部長

内田 さくら

(日本語学科四年)



1 フィルとは

まず簡単に私が所属しているフィルハーモニー管弦楽団について紹介したいと思います。

麗澤大学学友会フィルハーモニー管弦楽団、略して、「麗大フィル」は、弦楽器と管楽器とピアノで構成されている楽団です。音楽のジャンルは、クラシックからポップスまで幅広いジャンルを演奏しています。現在部員は、四年生三人、一年生五人とお手伝いで来てくださっている野林先生(二〇〇九年度から顧問)、そして留学生も合わせて十人で活動しています。

活動日は、金曜日の十八時三十分～二十時三十分で、二号棟の教室を使用しています。

一年の活動内容は、一号棟ロビーで行われる新入生歓迎コンサート、七夕コンサート、合宿、麗陵祭への参加、合唱部とのクリスマスコンサート、定期演奏会です。

2 フィルの現状と新たな挑戦

(ア) 廃部の危機！

フィルは、去年の三月なんと、四年生三人、留学生二人の計五人でした。留学生は一年の交換留学生

だったので、このまま一年生が入部してこなかったら「廃部になるかもしれない」という状況でした。そこで、今までの活動を見直し、大きく変えなければなりませんでした。その第一歩として、演奏形態を変えることです。

それは、本来私たちは「管弦楽団」として指揮者がいるオーケストラ編成を目指して活動してきました。しかし、年々部員数が減少し、部員ではなくお手伝いで来てくださるエキストラの人数がどんどん増え、名前は「フィルハーモニー管弦楽団の演奏会」とても素晴らしい演奏会だったのですが、「自分たちで作り上げた演奏会」とは言い難くなってきていました。そのため、今年からお手伝いとして参加して下さっている野林先生と相談し、「今の自分たちのレベルに合わせた演奏をする」ということ、つまり演奏形態を「室内楽」で活動していくことにしました。「自分たちのレベルに合わせる」というのは、演奏の質を落とすのではなく、少ない人数でもできる曲を選択または、編曲するということ

でした。

演奏形態を変えると共に変化させなければならなかったのが、部員の意識です。今までは、週一回外部から講師の先生を呼んで指導してもらっていたのですが、部員の意識がだんだん受身になってしまいい、自分たちから「どのような音楽を作りたい」という意識を出せなくなっていました。つまり講師の先生がいないと自分たちは何もできないという状況でした。このまま先生に甘えてはいけなさと考え、一度先生から自立し、誰かに甘えず自分たちがもっと曲と向き合っていこうと決めました。そのため、合奏中もできる限り自分たちで意見を言い合うことを心がけました。

そのようにして意識を変え臨んだ新入生の勧誘は、なんとかうまくいき、新入生七人が入部してくれました。

(イ) フィルを通して学んだこと

フィルに入部して四年、私は二度の部長を務め様々なことを学びました。

一つ目は、「音楽も毎日の積み重ねが大事」であること。これは、音楽だけでなく勉強、スポーツあらゆる分野にも言えることで、とても大事なことです。

フィルの特徴として、初心者も歓迎していることです。ちなみに私も大学からチェロを始めました。

一般の楽団とは違って、プロ集団ではないので「二度弾いてみたかった」という人も歓迎しています。また楽器もいくつか大学にあるので、貸出しを行っています。

今まで何人も「楽器を始めてみたい」と言ってお部してくれたのですが、弦楽器の難しさに挫折して何人もの人が辞めていきました。私も、なかなか楽器が自分の思っているように弾けず、悩んだことがあります。そして、弾けないから余計に弾きたくなくなり、部活の時間以外は弾かなくなったことがあります。そうすると、やはりもつと弾けなくなり、先生にとっても怒られました。そうして、弾いていて楽しくないけど、毎日一時間は弾くようにして

いたら、たった一週間でも進歩がみられ、だんだん弾くのが楽しくなってきました。そこから、日々の努力を怠ってはいけないということを学びました。また、今はやる気のある後輩がいるので負けじと毎日必ず三十分〜一時間楽器を触るようにしています。

「弦楽器が弾けたらカッコいい」や「ヴァイオリン奏者みたいな音を出したい」というのはよくわかります。そのためには目に見えない日々の努力を大切にするべきだと思います。

二つ目は、「準備もいい演奏を作るために大事」

であること。これは、中学・高校の部活動とは違って演奏会までの準備（演奏曲決め、練習日決め、演奏会場の確保、スタッフの確保、演奏会を行うための資金の確保）をすべて自分たちだけでやらなくてはいけません。大変かもしれませんが、これらの仕事も自分たちでやることで、演奏会が終わった時の達成感がまた各段と違う。そして、多くの人に支えられていることに気づくことができます。一つの演奏会運営を行うことは、他ではできない貴重な体験だと思います。

この部活は、音楽を楽しむだけでなく、音楽を通してさまざまな人たちと交流することができ、演奏会運営というここできできないことを体験することができます。

3 新入生のみなさんへ

最後に新入生のみなさんへメッセージを残したいと思います。

私は四年間フィルハーモニー管弦楽団に在籍して

きてよかったですと思います。大好きな音楽だけではなく、社会勉強にもなり、そして、多くの人と交流することができました。しかし、最近、大学の部活動に参加する学生がだんだん減少しています。少ない人数で活動せざるをえなくなってしまうている部活は、うちだけではありません。大学生生活の勉強以外の時間をバイトだけで過ごすのはもったいないのではないのでしょうか。この大学は部活動を行うのにもとても協力的です。部活の予算を組むとき、いろいろアドバイスをし、同じ学生であるため、相談にものってくれる学友会、部活動だけでなく委員会・サークルも含めて面倒みってくれる学生課。また、どんなに人数が少なくても、多目的ホールを快く貸してくれたダンス部のみなさん。音楽は国境を超え、留学生もたくさん参加してくれました。

私はこの四年間で多くの人に助けられ、普段の学生生活では関わる人がない人たちと交流することができました。本当によい経験だったと思います。



大学の部活は中・高校生のときの部活とはまた違い楽しくて、とても勉強になると思うのでぜひどんなものでもいいので、興味のある部活に参加してみてください。

音楽好きの人はフィルハーモニー管弦楽団大歓迎です。



ドーバーの小石

常務理事 田中駿平



私のオフィスのテーブルの上に真鍮の小皿に盛られた小石がある。その石の一つに鉛筆で一九八五・九・一一Doverと記されている。その夏、英語学科の学生を伴って総勢一七名でのケンブリッジ研修旅行に出かけた際のものである。

パリまでは大韓航空を利用し、そこからは、往復ともに鉄道とドーバー海峡をフェリーで渡る旅程であった。

ロンドンで一泊後、目的地のケンブリッジに向かい、八月十二日からエマニュエル・カレッジでの三週間の語学研修と、ダウンタウンからバスで二十分ほど

のヘイズリングファイールドという村でのホームステイを組み合わせたプログラムだった。この日の夜のニュースで、日本で乗客五百人以上を乗せたJAL機が御巣鷹山に激突したというニュースを聞いた。翌日、何人かの村人から同情の気持ちを伝えられたのを覚えている。

三週間、午前中の授業は、若い女の先生が学生たちの様子を見ながら程よく楽しませてくれるものであった。午後は各自、あるいはグループで、あるいは単独で、街の中を見物したり、買い物したり、帰宅してホストファミリーと過ごす者もいて、まちまちだっ

た。この間に三回、ストラットフォードやノリッジ、そしてウインザーへの一日旅行も組み込まれていたし、一度は自分たちでロンドンへ出かけ、当時三菱銀行ロンドン支店に勤務していた杉沢俊光氏（麗澤三十四期）に頼んで、リージェントパークの野外劇場の入場券を確保してもらい、『夏の夜の夢』を観賞したこともあった。日没の遅い北国の夕闇が次第に深みを増し夜風が葉末をならす中での印象深い観劇体験であった。

学生たちのホームステイ先でのトラブルやコミュニケーションションギャップの報告をいくつかは受けていたが、おおむねこの村での生活を享受していた。ラミング家の客人となった私も、主のオリーブやその子供たち、更には彼女の別れた夫の両親や義妹ジョウンと共に、英国の田舎の家庭生活を満喫した。オリーブは小学校の教師で、良識を持ち穏やかな人柄の女性なのに、なぜ離婚してしまうことになったのかは聞いていないが、そのことよりも、舅や姑、それに義妹と、何のこだわりもないかのように交わり、しばしば夕食や

ートルズ・ミュージアムをぜひ見たいという学生たちの声に応えたものであった。

見物後、ミュージアムの外でたまたま到着したばかりの日本人女子学生の一団に会ったが、何とその引率教員が私の大学時代の同級生で、札幌の大学で教鞭を執っているK君だった。卒業後初めて会うのが異国の



地という奇遇を
確認しながらの
報告で、彼はそ
の二、三日前
に、南部のソー
ルズベリーの街
を歩いていて、
そこでも偶然
に、同じく同級
生のO君に出く
わしたというこ
とだった。
そんな意外な

昼食を共にする姿が印象に残った。十年ほど前にオリーブがジョウンと連れ立って来日し、二週間ほどわが家に滞在してくれたし、その後われわれ夫婦で春の英国旅行に出かけた際には、何泊かさせてもらったことも含めて、この家族とは今日まで親交が続いている。私にとっても有意義な成果の一つである。

ケンブリッジの三週間の研修の後は英国各地を廻る旅行が組まれていて、それをブリット・レールで実施する予定だった。ところが、当時の英国はストが頻繁に起こる状況が続いていて、心配が的中、鉄道の旅の夢は断たれ、已むなく代わりにコーチ（バス）をチャーターして予定地を訪問することに変更した。ヨーク、エディンバラ、湖水地方、チェスター、コンウェイ、バース、ストンヘンジ、ロンドン、カンタベリー、ドーバーを十二日間で廻るといふ強行軍ではあったが、いずれも私が以前に一度や二度は訪れて、学生たちにぜひ見せたいと思っていた所だった。この旅程でただ一度の計画変更は、湖水地方からチェスターへの移動途中でのリバプール訪問だった。そこにあるピ

出合いも含んだ英国の旅の最後がドーバーでのフェリー待ちのひと時だった。午前のうちにカンタベリーからの移動を終え、海峡に臨む高台に立つ城の見物も済ませ、フェリー乗船までの、ぼつかりとあいた英国滞在最後の二時間ほどをドーバーの浜辺で過ごすことにした。海を眺め、研修を振り返り、特に何をしようともなく、海岸にぼんやりと腰を下ろしているという、今思えばこれ以上ないような贅沢な時間をもった。その時に、手持ち無沙汰を紛らわすように拾ってそのまま持ち帰ったのが、この机の上の小石である。

実はこのところこの石を見るたびにこの時の十六名の学生の一人、H君のことをよく思い出す。彼は、その後、学ならず中途退学したが、それでも発奮してチャンスに挑戦し、機会を得てバンクーバーの日本領事館で二年間勤務した。帰国後はやがて東京に出て仕事に励み、結婚して三人の子供を授かり、順調な人生を歩んでいたのに、病を得て、家族をはじめ友人たちの祈りも届かず、二〇〇七年秋に不帰の客となった。その時に、私の手許にある筈の、この旅行に関わ

る写真をはじめさまざまな資料、旅程から参加者リスト、ホームステイ先一覧表等が、一冊の出納帳を除いて、丸々行方知れずの状態にあることが分かった。私としてはそれらを整理し直して、コピーし、H君の人生の「こまを伝えるもの」として、残された夫人やお子たちに渡したいと思いつながら、未だにそれが見つからない。思い出したように家の中をあちこち空しく探して抱く歯痒さを胸にこの小石を眺めると、その時に彼も眺めたドーバーの風景が蘇ってくる。

海岸に打ち寄せる波、水飛沫、小石の擦れる音、百四十年近く前に英国の詩人マシュー・アーノルドが目にとめ、耳にして詠んだのと同じ光景が、まぶたに浮かんでくるのである。

コラム

「よい大学」とは

学務部長 今村 稔



「面倒見のよい大学」、それは麗澤大学の専売特許のように思っていました。最近、この面倒見のよさをウリとして標榜する大学が増えています。これは、少子化を背景とする大学全入時代の到来がもたらした状況であることは言うまでもありませんが、どうして今「面倒見のよさ」なのでしょう。

長い間、大学生は自律的に学習するものとされ、教室において授業を受けることだけが良しとはされず、様々な意味での勉強が推奨されてきました。しかし、進学率の向上とともに、自律的な学習習慣のない大学生が増え、面倒見を見てほしいと思う高校生やその

親が増えていて、これが大学選びの条件になっていることが、こうした現象を生み出しているように思われます。

こうした社会的な動きはありますが、本学では、昭和十年（一九三五年）の創立当初から採用されてきた全寮制に象徴される少人数教育が、現在でも面倒見のよさとして受け継がれています。今では全寮制こそ過去のものとなりつつありますが、例えば、入学前に学生の顔と名前を覚えるという努力を続けている先生方がいますが、この習慣は全寮制の頃の名残と考えられます。名前を覚えるという行為は、学生を集団として

扱うのではなく、個人として扱うという強烈なメッセージとなり、学生が自分の存在感を確認するとともに、居場所を確保できたと確信することにつながっています。現在では学生数も増え、全学生の顔と名前を一致させることは不可能な規模になってきていますが、ICT技術を活用することによって、学生を個人として捉えることのできる仕組みづくりを進めて行きたいと考えています。

また、事務窓口におけるワンストップサービスの実現に取り組み大学も増えています。この「ワンストップサービス」は、元々は複数の手続きを一度の手続きで済ませることですが、大学では、伝統的に教務・学生・就職といった縦割り組織での対応であったものを一元化することによってサービスの向上につなげようという取り組みです。

本学でも、平成十八年度に事務組織を大幅に改編し、窓口業務を行うセクションを学務部として集約しました。従来は、教務部、学生部、就職部、国際交流センター事務室、図書館事務室といった、業務区分に

での学習成果に注文がつけはじめました。

最近の調査では、企業の求める人材として「多くの人と接するのが得意」や「他の人との折衝が得意」といった項目に高い支持が集まっています。また採用時の選考に当たって重視する点を聞いた別の調査でも「コミュニケーション能力」が際立って高い結果となっており、いずれの結果も、いわゆるヒューマンスキルが求められていることを示しています。

こうした産業界の状況を反映して、経済産業省は大学生が獲得すべき力として「社会人基礎力」という言葉を使い出しました。この「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の三つをその内容としています。いずれも、人間として社会生活を営む上で、極めて重要な要素ではありますが、大学四年間だけで培えるものとは思えません。

さらに、中央教育審議会の大学分科会小委員会では、平成十九年にまとめた素案において、学士として必要とされる力を「学士力」として、知識・理解、汎

よる縦割り組織でしたが、それを統合することによって学生サービスを一元化し、よりよいサービスを提供することがその目的でした。とはいえ、すべてのセクションを同一のフロアーに配置するという究極のワンストップ化は、スペース上の問題で実現できませんでしたが、最も学生にかかわりの深い教務課と学生課がそれまで別の建物に配置されていたという状況を改め、同じフロアーに配置することを改革の象徴として実現しました。この改組からすでに三年が経過し、学生にとっての利便性は向上したと考えていますが、開学五十周年の最大の記念事業である新校舎の建設を見据えて、さらによりよい仕組みを模索しているところです。

学生が卒業して出て行く社会も大きく変化しています。かつて高度成長期と言われた時代には、大学生を受け入れる企業が人を育てる力を持っていたため、大学での学習成果に対する期待は低いと言われていました。それがバブル崩壊後、効率化が最優先課題となった結果、人材育成に割く力が省かれると同時に、大学

用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験と創造的思考力の四つの分野ごとに細かく定義しました。

〈各専攻分野を通じて培う学士力と学士課程共通の学習成果に関する参考指針〉

1. 知識・理解
 - (1) 多文化・異文化に関する知識の理解
 - (2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
2. 汎用的技能
 - (1) コミュニケーション・スキル
 - (2) 数量的スキル
 - (3) 情報リテラシー
 - (4) 論理的思考力
 - (5) 問題解決力
3. 態度・志向性
 - (1) 自己管理能力
 - (2) チームワーク、リーダーシップ
 - (3) 倫理観
 - (4) 市民としての社会的責任
 - (5) 生涯学習力
4. 統合的な学習経験と創造的思考力

これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

※この内容の詳細は文部科学省のホームページに掲載されていますのでご参照ください。

この定義は、大学教育の質が低下しているのではないかといった懸念が世間に広がり、それに歯止めをかけるために考えられた教育目標ですが、学士課程の学習到達目標を一律に設定することを意味しますので、一部には抵抗があったようです。しかし、平成二十年十二月末に出された中教審の答申「学士課程教育の構築に向けて」に正式に盛り込まれました。さらに、二十一年度の予算要求においても「学士力確保と教育力向上プログラム」という項目が盛り込まれたことから、国としてこの「学士力」という概念を定着させ、大学に対して卒業要件の厳格化を求める姿勢を鮮明にしたと言えるでしょう。

本学では、従来から卒業・進級の判定は厳格に行われており、また少人数での教育ゆえに密度の濃い人間関係が形成されていることや、多くの外国人留学生がいる環境が多文化理解を促進しているという側面もあり、今求められているヒューマンスキルを養うという点では恵まれた環境であると言えます。

さらに、本学では、入学式の際に、学長が「今日か

らあなたがたを紳士・淑女として扱う」と告辞することが慣例となっていました。この言葉が学生寮での自治生活の経験と結びつき、学生の主体性を養い、自律的行動を促すことにつながっていたと考えられます。

今年、麗澤大学が開学して五十周年という記念すべき年です。この機会に、これまでのよき伝統を確認し受け継ぐとともに、学生の人格形成という大学の重要な役割を再確認することも必要だと思います。言うまでもなく、学生にとって大学での生活は、人生そのものの方向性を決定するといっても過言ではありません。自律的に物事を考えられるようになるために、また、大きな志を持って社会に貢献できるようにするためには、学生一人ひとりの活動が、学内に止まることなく、地理的にも社会的にも大きな広がりを持つことが必要になります。一律的ではなく、個々の学生に則した、「これが麗澤の面倒見」と言えるような支援態勢を作り、次の五十年に向けて、より「よい大学」づくりに貢献していきたいと思えます。

コラム

麗澤大学での一年間留学

イェーナ・フリードリヒ・シラー大学の特別留学生

フランツィスカ・クリンナー



私は長年にわたり、日本へ来る事を思い描いており、とても楽しみにしていた。留学目的で来日出来る事になった時、喜びと共に日本での生活に対するある思い込みがその時あった。それは日本での生活や食事に不満や抵抗なく暮らせるだろうという楽観的な憶測である。私の大学があるイェーナ・フリードリヒ・シラー大学には毎年多くの日本からの留学生がおり、私はタンデム（一対一での会話練習）や日本人学生との交流を通して日本での生活を自分の中で想像することが出来たからだ。

最初の数週間、私は日本の生活のリズムの速さに驚

いた。時差ぼけが治らぬ間に過ぎていく時間、それは説明会、オリエンテーションキャンプ、そして息つく暇もなく始まった授業と、まだ慣れない生活の中で私は一時期不安が不満へと変わることもあった。

私が受けた麗澤大学の授業の進め方には最初かなり戸惑った。それは、ドイツでは学生主体の授業に対し、麗澤大学の授業はほぼ教授主体で進められることが多いからだ。私は、中学生に戻ったような錯覚に陥った。最初それを、教授は学生をただの学生としか見てなく、一人一人別の意思を持った人間として見えないと思った。だがその考えは時が経つごとに変わっ

ていった。つまりそれは、先生の私達に対する思いやりであり、私達学生をある一定のレベルまで伸ばしてあげようという気遣いであると理解することが出来た。そのようにして私は授業の中で多くの知識の他に日本の授業のあり方についても学んだ。

寮生活においても、同様なことが言える。寮では入浴時間の制限や門限、寮掃除そして寮会議など、何故そんなに規則が必要なのかと思えるほどたくさんあった。ドイツでは学生達が自分たちで共同アパートを借り、部屋を共有し生活することが多い。その中で最低限の規則はあるが、それも話し合いによって決められる。集団の中の個人が重要なのであって、個人の集まりの集団が重要なのではない。留学当初思っていたこの考えも時が経つことに変わっていった。寮掃除では普段会話しない寮生との会話が出来るし、寮会議では寮長を中心としてみんなで色々なテーマで考えることが出来る。麗澤の寮生活は他人との関わり、そして寮の住民の助け合いが重要なテーマなんだと理解することが出来た。

もう一つ、寮生活は最高に楽しかった！ 仲の良い人とずっと語り合った夜や、色々な国の料理の試食など一生忘れられないものになるだろう。

最後に、麗澤大学の最大の魅力は友達が出来やすそうな温かい雰囲気だ。緑に囲まれたキャンパスは一見小さく見えるが、一日に何回も知り合いに出会うことが可能だ。一度も話したことがない学生と毎日のように挨拶するようになったこともある。この麗澤大学に感謝をしたい。そして、支えになってくれた友人達と、私の面倒を見てくださった国際交流センターの担当者に感謝いたします。



コラム〈温故知新・その七〉

東亜専門学校の創設

麗澤大学名誉教授 池田 裕



昭和十年に発足した道徳科学専攻塾であるが、如何せん、一私立各種学校であったがために、自由ではあったが、その反面不利な制限があった。その第一にあげられるのは、兵役延期の特権がなかったということである。当時、日本は「国民皆兵」を標榜し、男子は二十歳になると全員「徴兵検査」を受ける義務があった。そしてその検査の結果、全員「甲、乙、丙、丁」と格付けされた。「丙、丁」種に入れられた者は、兵役は免除され、「甲、乙」の者はそれから二年乃至三年間二等兵（海軍に入った者は二等水兵）としてそれぞれの本籍にある兵営に入営することになっていた。

但し、大学もしくは、高等学校、専門学校（何れも旧制）に在学中の者は、そこを卒業するまで希望すれば延期してもらえたのであるが、この制度（特権）の適用が、わが専攻塾にはなかったのである。

したがって専攻塾に在学中の者でも二十歳になると容赦なく召集されて軍隊に入らねばならなかった。専攻塾の一期生をみると、入塾した時には百名余の生徒がいたのだが卒業したのは三十名を越えなかったと聞いている。殆どの塾生が修学途中から兵営の門をくぐったのである。そんな事から、昭和十七年に旧制の専門学校令に基づく学校に昇格させたのである。

転学を勧めた。もちろん父兄たちへは連絡のうえのことである。準備期間も短いということから、学校では生徒募集に新聞広告その他による一般公募を行った。そして専攻塾本科二年と一年の塾生は、東亜専門学校の一年生として新しく入学した。

廣池学園の経営になる東亜専門学校は、その名が示すとおり、第一部支那科（中国語）と第二部南洋科（マレー語）からなり、おのおの定員三百名計六百名、修業年限は三年で、廣池千英が校長に就任して、昭和十七年四月十五日、開校式ならびに入学式を挙行した。この日学校は第一部支那科に一二名、第二部南洋科に一一八名、計二二〇名の新入生を迎え、学園内にはわかに清新澆瀾の気がみなぎる感じであった。

つぎに、午前十時から行なわれた開校式の模様を「東亜専門学校日誌第一号」より転載する。

四月十五日（水）晴
午前十時開校式挙行
式次第

- 一、大講堂参集（午前九時五十分）
- 一、来賓入場
- 一、開式の辞（午前十時）
- 一、宮城遙拝
- 一、皇軍将士の武運長久ならびに戦没者の英霊に対して感謝黙禱
- 一、国家斉唱

入学式に臨んだ。

「修天爵而人爵従之」と大書された扁額の下に立たれた校長先生は「きょうから諸君を紳士として扱う」と告示された。（そして、本校には規則というものは無い、自己反省か退学か、これが本学の創立以来の鉄則だ、とつけ加えられた）戦争下の、すでに紳士という言葉などまったく見聞きすることのできない時代に、それどころか配属将校のサーベルの威圧のもとに教育がすすめられていた時代に、しかもまだ十七、八歳の年若い青年に、このように呼びかけられたそのときの感激を、いまでも忘れることができない。

ところが、好事魔多し、と言わんか。見事に満帆の船出をしたもののそれわずか一年半にして、左に述べた「兵役延期」の措置が、全廃された。但し、理工系学部並びに医学部は兵役を延期できた。本校も折角得たその特権も戦局の逼迫から剥奪されたのである。そして多くの学生生徒が軍隊に召し上げられた。それを世は「学徒出陣」と称した。この事については本誌第十三号に詳述した。

二十歳以上の本校生徒百数十名は、かくして校門を後にして兵営へと進んだのである。

しかし、「学徒出陣」しなかつた学生は、やがては

- 一、勅語奉読
- 一、校長挨拶
- 一、来賓祝辞
- 一、新入生総代誓詞
- 一、閉式の辞

以上

- 一、来賓
小金町長 鈴木喜太郎氏、駐在所 圓崎平五郎氏、小塚貞義氏其他数氏
- 一、祝辞 鈴木町長、小塚貞義氏
日賀田指令官殿、穂積男爵、岩倉公爵、宗伯爵、中野金次郎氏、宮崎憲兵隊長
藤原千葉県知事
右諸氏よりの祝辞の手紙を御電話ありたり、木曾理事披露す
- 一、新入学生総代 鎌田勘次郎誓詞を述べ
- 一、来賓 百六十余名
丸井熊吉氏、白木茂安氏、杉本徳次郎氏、梅沢源一氏、高山定右衛門氏、山本吉次氏、若生憲雄氏、加藤伊之助氏
その他各地より参列
参列者一同に開校記念品（湯呑一對）贈呈す。

つぎに入学式における校長挨拶についての新入生の回想（大沢俊夫「追憶廣池千英先生」より）を掲げる。

昭和十七年四月、新聞の片隅に出ていた東亜専門学校の募集広告をみて応募した私は、その日第一期生として

身に迫ってくる兵役を覚悟しながら、日夜勉学に励んだことであろう。

ところが、そこへ追い討ちをかける事態が生じた。それは「学徒に対する勤労働員令」なるものが発令されたのである。この発令によって教室での授業はほとんどなくなった。生徒は軍需工場などへ駆り出され、主として軍需産業に従事させられた。その時の模様をつぶさに語る記事があるのでそれを左に紹介しよう。それは『意気の詩』（麗澤八期生五十年の追憶集）平成六年十月十日、一二六ページ。

「次々と動員」

さて入学当時はこの位にして、追い追い生活にも慣れて夏季に入ると、七月二十日頃に一年生（八期）だけに十日間の夏休みがありましてね。それで、夏休みから帰校したら号舎が変わっておりましてね。何でも当時、二年生の方がみんな荷物を新しい部屋へ運んでくれていましたね。三年生はその時も日本鋼管の方へ動員になって行ってしまわれ、新しい号舎生活は二年生の号舎長、部屋長さんになっておりました。

伊藤 午前中だけ授業をして、昼から作業ばかりになったのは二学期からですか？

高間 そうです。二学期からですね。確かそれまでに夏休み後すぐに富士山の野外演習に行っていますね。戻ってきてから二学期の勉強に入り、その頃から陸軍糧秣廠へ動員ということになってね。午前中だけの授業になったと記憶しています。

丹羽 僕は夏休みが十日間しか無かったというのほちよつとわからんね。八月の初めに戻ってきて野外演習に行つたというけれど、そのあたりの記憶がさっぱりない。夏休みがそんなに短かったと思えんのやがね。

吉井 いやいや、短かった。確かに短かったですよ。あつたかなかつたかという位のもんやつたと覚えてるけどね。井沢 やっぱり世界の状況がやはりかなりキツかつたのでしようなあ。

高間 そう、もうその頃は、あの戦局がだんだんと悪くなり、極度に切迫していたんでしようなあ。

山口 二年生の人が皆動員に行かれたのはその時からかな？
高間 いや違います。二年生はまだその頃おられたですよ。二学期も、もつと後からです。富士山の野外演習も二年生も行っていますしね。七期生の二年生が動員に行かれたのは十月頃からですよ。後は号舎長、副号舎長のみ残られて、各部屋は一年生同士で部屋長ということになりましたね。

大熊 確か二年生が行かれたのは川崎のどこかでしたね。
島津江 二年生は昭和電線で、三年生は二学期の始めから日本鋼管へ行かれた。

かくの如く、太平洋戦争のおかげで学校といえども学校の体をなしていない状態であった。即ち形は校舎、学園ではあつたが、その実は、兵舎であり、工場であった。因みに、現在の貴賓館は軍隊（郷土防衛隊、鉄部隊）の将校用の兵舎になり、生徒の寮は同じく兵員の兵舎となっていたのである。

やがて昭和二十年八月十五日終戦とともに学校として再出発することになったが、敗戦の爪跡が生々しかった（物心ともに）この学園は如何にして復興の途を歩んでいったか。これは特筆大書すべきことになるだろう。

編集後記

◆本号は「社会で活躍する卒業生」を特集しました。卒業生が自分の歩んできた人生を振り返ったとき、麗澤大学で学生生活を過ごしたということは、どのような意味をもってくるのだろうか。また在學生やこれから大学へ入ろうと考えている人たちが読むならば、大学で何を学ぶか、また大学で学んだ何が役立つのかというような根本的な問題に対する解答を示唆されるのではないかと考え、「この企画を思いつきました。また「学生生活を語る」という座談会で語られた在學生の意見も、「麗澤大学の今」で取り上げた課外活動についての現役のリーダーの熱い思いも、ともに麗澤教育の重要な成果を示唆するものです。

◆卒業して四十年、十年、そして在学中の学生と三世代の方々の意見を通読し、巻頭に掲載した両学部の初年次教育についてのレポートにより、本学のきめ細かい修学支援の実態を知ることによって、麗澤教育の特色といふべき共通したものを見出すことができるように思います。

◆これらはひとえに、ご多用にもかかわらず快くご執筆していただいた皆様の誠意の賜物であると思います。ここに衷心より感謝申し上げます。

◆本誌によって、一人でも多くの卒業生が自らの大学生活を振り返り、在學生が本学で学ぶことの意義を自覚し、さらにこれから麗澤大学に入学しようとする高校生が本学における教育の特色を知ることができれば、望外の幸いです。

◆本誌の内容に関する意見、感想、提案などがありましたならば、麗澤大学広報室までご一報ください。
出版委員会委員長 井出 元

出版委員会委員長 井出 元

委員（外国語学部） 淡島成高・金丸良子・杉浦滋子・町恵理子

委員（経済学部） 佐久間裕秋・竹内啓二・長谷川泰隆・花枝美恵子

市川八千代（プラザ事務課長）

前川能教（企画部長）

鳥潟貞幸・鈴木敦子・小林友紀子

事務局

『麗澤教育』第十五号

二〇〇九年四月一日

編集 出版委員会

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 ○四―七―七三―三〇三〇

印刷所 ベクトル印刷(株)

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー

